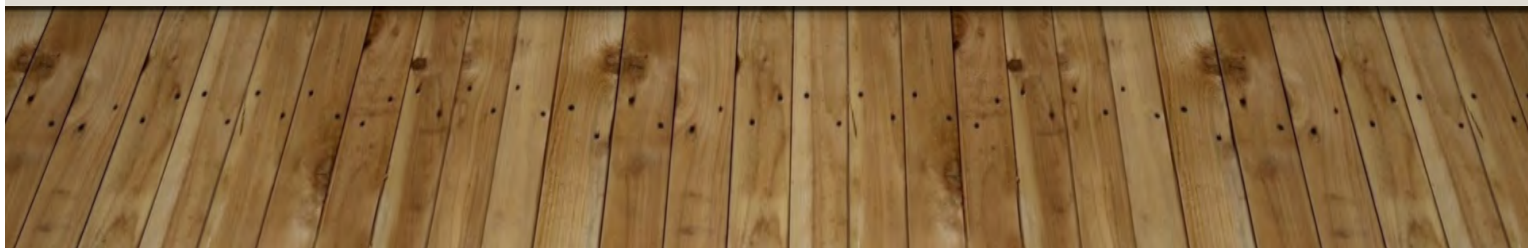


JSNPの50年を思う



【JSNPの50年を思う】

学会の運営に携わってこられた歴代理事長，大会長，名誉会員，
現理事の方々からのメッセージ（所属，敬称略，50音順）

1	安東 潔	神経精神薬理学会：どこから，どこへ	…	50
2	池田和隆	これからの日本神経精神薬理学会への期待	…	56
3	石郷岡純	私の精神薬理学と日本神経精神薬理学会への期待	…	58
4	尾崎紀夫	2006年三学会合同大会の思い出： 鍋島先生とご一緒に初の全国学会大会長	…	60
5	加藤 信	精神薬理談話会の思い出	…	62
6	菊池哲朗	CINP/JSNP 合同精神薬開発タスクフォース ワーキンググループの活動に参加して	…	64
7	喜田 聡	日本神経精神薬理学会への感謝と期待	…	70
8	北市清幸	日本神経精神薬理学会のご縁があつてこそ	…	72
9	佐藤光源	50周年を振り返って	…	74
10	鈴木 勉	精神薬理学と伴に	…	76
11	曾良一郎	第40回日本神経精神薬理学会を開催して	…	77
12	田中正敏	国際神経精神薬理学会議（CINP）への参加	…	78
13	砥出勝雄	学会との出会い、繋がり、そして自身の成長へ	…	80
14	中込和幸	JSNP50周年記念誌に寄せて～精神科の臨床研究について	…	82
15	鍋島俊隆	日本神経精神薬理学会（JSNP）と共に歩いて47年	…	84
16	成田 年	振り返れば、本学会の参加が今の自分の起源だった	…	87
17	野村総一郎	赤城山合宿の思い出	…	90
18	服部信孝	日本神経精神薬理学会50周年に寄せて ～脳神経内科と精神医学の融合	…	91
19	樋口輝彦	本学会で活動した時代を振り返って	…	92
20	宮田久嗣	薬物・精神・行動の会から日本神経精神薬理学会までの道	…	94
21	山本経之	いまだに消えることのない記憶は――？	…	96
22	山脇成人	JSNP50周年を迎えるにあたって；JSNPと私 ～赤城合宿からCINPに至るまで	…	97

日本神経精神薬理学会：どこから、どこへ

安東 潔

所属 1) 神経行動解析リンクス

<https://sites.google.com/view/behavior100/>

所属 2) 公益財団法人 実験動物中央研究所



○JSNP は、どこから

現在の日本神経精神薬理学会（The Japanese Society of Neuropsychopharmacology: JSNP）のスタートは、半世紀前の1971年3月20日開催の第1回精神薬理談話会でした。この談話会の事務局は、東京都新宿区弁天町の清和病院 神経研究所と記憶しています。当談話会は、神経研究所の精神科医 小林司先生、実中研の薬理学者 柳田知司先生、東京教育大学（現：筑波大学）の心理学者 岩原信九郎先生の3人を発起人として設立されました。先の第1回談話会の前年に、上記発起人主宰の精神薬理学講習会が、東京都新宿区信濃町野口英世記念館で開催されています。そのときには、数十名の熱心な参加者が集まり、上記世話人の先生は、これに手応えを感じて、精神薬理談話会の発足を決断されたと思います。

○会設立当時の周辺状況

この会設立のきっかけとなった当時の状況として、抗結核薬イプロナイアジッドがうつ病に、抗ヒスタミン薬として開発されたクロルプロマジンが統合失調症に、また染料を目的とした化合物創出過程からのクロルジアゼポキサイドが不安神経症に、それぞれ臨床適用されたことが挙げられます。これらが発端となり、精神科領域への様々な治療薬開発研究に弾みがついていました。そこで、中枢神経薬理学領域には、電気生理学、生化学、行動科学などの知見や技術が導入されはじめました。談話会設立直前の1968年には、小林司先生編集の名著「新精神薬理学」が医学書院から、また行動科学の薬理学領域への応用に関する最初の教科書 T. Thompson & C.R. Schuster 著 “Behavioral Pharmacology” が Prentice Hall, Inc., から、それぞれ出版されました。これらの出版は、新たな学問研究の到来を告げる役割を担っていたと考えています。さらに、先に述べたとおり、わが国の製薬企業も、中枢神経薬あるいは向精神薬の開発に熱い眼差しを向けており、本学会には当初から製薬企業の若い方々の積極的な参加があり、これも、当会のその後の発展の弾みとなりました。

○談話会のその後のあゆみ

この談話会は、時代の流れと社会的ニーズに適合し、参加者数も年々増加し、学会としての充実がみられ、精神薬理研究会となり、さらに現在の日本神経精神薬理学会へと発展し

てゆきました。また、機関誌「薬物・精神・行動」を発行するようになり、当初は群馬大学医学部田所作太郎先生や神経研究所の加藤信先生（その後、実中研、現在：加藤メンタルクリニック）が、機関誌の編集や発行に深くかかわっておられました。この後は、多くの学会員が、編集委員長、編集委員となり、また会員の方々の投稿などに支えられ、日本神経精神薬理学雑誌（The Japanese Journal of Neuropsychopharmacology）となりました。会員としては、この機関誌が郵送されるたびに、開封閲覧し、JSNP 学会員としての自覚と帰属感を深めていったと思っています。しかし、機関紙発行経費は、学会予算の中で占める割合が大きく、また紙媒体機関誌の限界が感じられる時代となりました。このような状況の中で、当学会機関誌も電子化されて、Neuropsychopharmacology Reports として、時代に適合したオープンアクセス化への進展がみられています。論文掲載処理に際して、著者側の少なからぬ経済的負担が問題ではありますが、ネット上で全世界の誰もが、この学会発行の論文をフルテキストで自由に読めるシステムは、現代学術誌刊行の一つの大きな流れとなっています。今後は、かつて、郵送されてきた紙媒体機関誌受け取り時に経験した学会員としての帰属感をどう補完してゆくのか、あるいはそのようなものは、もう必要ないのかについて考える余地は残されているかと思っています。

○JSNP の海外学会との交流

米国ハワイ州マウイ島で 1980 年代に実施された 米国神経精神薬理学会（American College of Neuropsychopharmacology : ACNP）と JSNP との合同プログラムは、わが国において海外の研究者との交流が本格的に開始され始めた大きなうねりの中での出来事でした。薬物依存で世界的業績を挙げられ、国際的にも知名度の高かった柳田知司先生の尽力が大きかったと思っています。これについては、たまたま私が、柳田先生の身近にいたためにその感が強く、おそらくは他の多くの当学会の会員の方々の積極的関与があってこそ、この合同プログラムは成功したとも思っています。これは、その後の 1990 年京都開催の国際神経精神薬理学会（The International College of Neuropsychopharmacology: CINF）につながってゆきました。これ以降の国際学術交流は、本学会の活動の一般的な流れとなりました。

○赤城山での合宿

群馬県赤城山国立青年の家での合宿については、群馬大学の田所作太郎先生とその教室員の方々に大変お世話になりました。数十名の当該領域の研究に関心をもつメンバーが集い、寝食を共にした 2泊3日くらいの日程で、学術、運動、その他の交流が、極めて打ち解けた雰囲気の中で行われました。参加メンバーも多様で、大学関係者、研究所関係者、医療関係者、製薬企業関係者などが集い、精神薬理学の枠内とはいえ、異文化交流的趣を呈していました。この合宿で学んだ精神薬理学の理解と、そこで築いた人脈などを含めたものが、参加者のその後の命運に少なからぬ影響を与えたと考えています。

○JSNP から受けた恩恵

この学会において、私は多くの方々と当初から交流をさせていただき、様々な面で恩恵を受けてきました。学会発表に向けた連日の深夜までの準備、自分の発表後に受けた痛手や励まし、啓発的な講演の視聴、会員との意見交流などが、研究を継続してゆく上での大きな動機づけとなりました。今にして思えば、このような学会は、特に若い研究者にとって、他では得られない教育の場であり、日本の学術研究の継続的な維持発展に、重要な役割を担っていたと考えています。特に、この学会には、神経精神薬理学領域での基礎研究と臨床医学研究、それに医薬品開発研究という実利的領域も含めた三種をリンクさせたコンセプト遺伝子が存在していました。このような点において、わが国では、他にみられない特色を持つ学会としての輝きを発していると思っております。

○JSNP と同年齢の米国神経科学会

米国神経科学会 (Society for Neuroscience : SfN) の年次会合に、私は最近まで毎年参加していました。ここでは、3万人もの世界の脳神経科学者が、Washington, DC, San Diego, Chicago などの巨大コンベンションセンターに集います。ここには、神経学、神経解剖学、神経病理学、生理学、生化学、精神医学、精神薬理学、行動科学、分子生物学、遺伝子工学、発生工学、再生医療学、イメージング工学などの脳に関するあらゆる分野の研究者、臨床家、教育者、行政担当者、出版や実験機器の製作ならびに販売に携わる関係者などが参加し、深い触れ合いと議論を通じた世界レベルの最新情報交換の場となっています。

SfN の学会としての創設は、1969年で、第1回会合は、奇しくも JSNP と同じ 1971 年で、Washington, D.C. において 1,400 人ほどの参加者により開催されたとのこと。また、当時の脳科学研究者は、どちらかという生物/医学系研究者の中では、主流ではなかったと思います。同じ回数を重ねてきた日本神経精神薬理学会とあわせると、現在の脳科学の進歩と一般市民の脳に関する関心の高まりには眼を見張るものがあります。高齢化社会の到来により、だれもが、アルツハイマー病、パーキンソン病、ALS (筋萎縮性側索硬化症) などを身近な疾患課題と考えるようになりました。当時、そのような風潮は限定的でした。2020 年には、SfN も巨大学術集會に成長して、生まれ故郷の Washington, D.C. に帰還し、50 周年を祝賀することになっています。ただし、新型コロナウイルス感染症 (COVID-19 pandemic) の動向によっては、状況は少し流動的のようです。

SfN が最初から目指していたことは、当時それぞれの研究者ごとに断片化されていた脳に関する個別的専門的知識を統合する場を設定し、そこでの醸成を通して、システムとしての脳に関する統合的理解とこの科学研究推進のながれを創り出すことでした。また、脳研

究の重要性と脳に関する知識の意義を国家行政府と社会にアピールすること、そのためにも、高等学校から充実した脳科学に関する知識を教育し、脳についての関心を国民に持ってもらうことでした。このような学会当初からの明確な方向性と目論見と努力は、50年の歳月を経て、少しずつ実りつつあるようにも感じています。

○JSNP は、どこへ

最近、COVID-19 pandemic の深刻な問題が発生し、学会の根幹ともいえるリアルタイムでの人々の熱い交流がブロックされる状況となりました。これまでも大震災や台風などの自然災害で思うに任せない場合が幾度かありました。しかし、今回のケースにおいては、いずれ困難は乗り越えられるとしても、社会で人々が集うことの固有のメリットへの再認識とともに、そのリスクとコストにも眼を向け、学術集会のあり方を根本的に見直すきっかけとなったと考えています。

本稿においては、私が恩恵を受けてきた JSNP 学会について、組織としての学会本体と学術集会としての会合を一体化して述べてきました。今回の重大なウイルス感染の災害に遭遇し、まずは人々が集う学術集会のあり方について考え、次にそれに対応した学会組織本体のあり方について論議する道筋があると考えます。

これまでの学術集会の開催には、主催者側の知恵と労力と時間と経済的負担に大きく依存しており、開催していただいた先生には感謝の言葉しかありません。とりわけ、大きな災害が発生したときのご対応には想像を超えたご苦勞があると推測いたします。一方、学術集会開催には、主催者側のこのようなご苦勞の他にも、学会本体側、学会協賛者側、またなによりも学会参加者側の経済的負担なども無視するわけにはいきません。先に述べた SfN の動向と発展の歴史をみると、SfN 学会本体が、その学術集会を成功させるためには、会員のニーズに最大限どう応えうるかを最重要課題としてとらえていると感じてきました。ただし、このニーズというのは、アンケート調査などで知られる表面的なものではなく、深い洞察のもとで探り当てられるものようです（多数の人々はその時点では自覚せずとも、一歩先で何が真に求められているのかについて、Apple の Steve Jobs の洞察が思い浮かびます）。SfN 学術プログラムの内容などの学問的側面は、当然ながら学者や研究者が主導権をもって組み立てていると思います。しかし、SfN 学会組織ならびに学術集会の運営については、いわば W 杯などを開催するレベルのプロ企画集団が戦略をねって、運営に当たっているのではないかと勝手に想像しています。そうでなければ、極めて高額な SfN 年会費、参加費、抄録掲載料、さらにそれら以上の旅費を払ってまでも、数十カ国からの多数の研究者が参加するダイナミズムはうまれないと考えています。もちろん、JSNP がこの真似をする必要もありませんが、学術集会開催には、会員参加者側の知的学問的実質的ニーズを探り当てることが極めて重要であることは共通と考えています。

とはいえ、本質的ニーズを的確に探り当てることは容易ではありません。そこで、たとえば神経精神疾患医療向上とそれに関わる基礎研究や医薬品開発研究の発展など、喩えていうなら生物細胞の核に存在するコンセプト遺伝子を重視する視点の中から、参加者のニーズを探り出してゆけるのではないかと考えています。もとはといえば、この学会設立時には、そのような遺伝子が中核にあり、それによる必然の中で、この学会は発展してきたのですから。

現時点でのわれわれの正直な心情としては、多くの参加者に満ち溢れた活気ある学術集会在いがいちばん望ましいと願っています。しかし、そのことがままならない場合には、インターネット技術を駆使したネット会議やコメント機能による質疑応答などで済まざるをえなくなりました。そこで、今回の事態をきっかけとして、学会が担ってきた学術情報の交流などについては、既成概念とは別の技術変革について考えてみるができます。

このような事柄を踏まえて、今後の学会について考える上で、学会のこれまでの役割を分析し、その一つ一つについてどのような変革が可能なのを以下に、まずは学術集会参加者側の期待という視点で項目別に列挙してみました。学術集会と学会組織本体の問題は同じではありませんが、まずは学術集会について考えるところからスタートするのがよいと考えました。学術集会のない学会組織はないと思いますが、学会機関誌をオープンアクセス形式で発行する場合には、集會に参加せずとも、また学会員でなくても、その機関誌公表のみを利用する可能性はあり、従来の学会とは違ったかたちも垣間見えてきます。

参加会員側の学術集會に期待する項目：1. 自分に興味ある分野の研究状況の知識技術収集、2. 研究発表による他からの批判などを通じた自身の研究のさらなる推進、3. 上記を通じた自身の研究継続の動機付け、発表や質問の仕方や会員との接し方のマナーなどの習得、4. 医療従事者自身の医療情報技術収集、5. 製薬企業の視点からの医薬品開発や研究状況収集、6. 会員の教育推進と研修資格取得、7. 新たな研究費獲得、会員間の共同研究ならびに業務提携の推進交流、8. 会員の就業、留学、人材流通、9. 学会として政府、社会、医療、企業、教育界への提言、10. 会の開催を利用した個人的交流、同窓会開催、11. 学会開催地の観光、12. その他（この中にこそ、上記でも触れていない重要な可能性が存在していると思います）。

上記項目は叩き台として列挙したに過ぎず、今後の対策については、これらに沿って、ネット技術を中心とした新しい仕組みで代替できるのか、できないのかをまずは検討することから始めるのがよいのではないかと思います。

JSNP 創設時の 50 年前には、パソコンもなく、学会抄録はタイプライターを利用して

ました（もしかすると、手書きだったかもしれません）。また、学会発表では、パワーポイントも Keynote もなく、タイプや手仕事の原稿を 35mm フィルムに現像していました。さらには、e-mail も、ネット環境もなく、すべての通信は、黒電話、ファックス、郵便物でした。一方、現在では、ネット上で適切な検索を行えば、you tube などから、内容のしっかりした素晴らしい学術講演、講義、研究情報などが、世界中から、自分の都合のよい時に、繰り返し何度でも、何処にも出掛けず、またコストもかけずにたっぷり視聴できる時代となりました。

JSNP 50 周年をきっかけとして、さらなる 50 年の未来社会の変容について自由に思い描くことの中に、この JSNP 学会の将来の姿がみえてくると思います。そして、技術革新を含む社会変革に適応しつつも、学会設立に至ったコンセプト遺伝子の必然性を振り返り、あるいは学問や社会情勢の変化に応じて、躊躇なく新たな外部遺伝子を導入することの中に、学会維持発展のヒントが見出せると思います。また、学会存続の条件は、学会参加者側の知的学問的実質的ニーズにどこまで応えうるかに依存していると考えます。とりわけ、この学会は、基礎研究と臨床研究と医薬品（広義には、バイオプロダクツや ES/iPS 細胞なども含める）研究のリンクをコンセプトとしている限りにおいて。

これからの日本神経精神薬理学会への期待

池田 和隆

公益財団法人東京都医学総合研究所精神行動医学研究分野



日本神経精神薬理学会（JSNP）が創立 50 周年となることを大変おめでたく思います。また、多くのことを学ばせていただき、私の研究者人生で大きな部分を占める JSNP を創り、育て、発展させて下さった方々へ、改めて感謝申し上げます。

私は 2001 年から JSNP 会員となりました。神経精神薬理学の領域では少ない工学部の出身者なので、JSNP でご指導いただいたり共同研究者を増やせたりしたことが、この領域で研究を続けていく上で決定的に重要でした。そこで、JSNP からの依頼は全て引き受けて全力で取り組むことにしていたところ、2009 年からの 4 年間と 2014 年からの 4 年間に理事、2016 年からの 2 年間に理事長を拝命いたしました。また、2016 年のソウルでの年会の年会長を務めました。このような役職を通して、この領域のリーダーの先生方と苦楽を共にする貴重な機会を得て、研究者人生にとどまらず人生にとって掛替えのない時間を過ごすことができました。

第46回 日本神経精神薬理学会年会
46th Annual Meeting of the Japanese Society of Neuropsychopharmacology
JSNP2016 Seoul

会期 **2016.7/2[土]・3[日]** 開催地 **ソウル (COEX)**
July 2(Sat)-3(Sun), 2016 COEX, Seoul

年会長 **池田 和隆** 公益財団法人 東京都医学総合研究所
Kazutaka Ikeda (Tokyo Metropolitan Institute of Medical Science)

連続開催 第30回国際神経精神薬理学会 (CINP) ソウル大会
30th CINP World Congress of Neuropsychopharmacology
2016.7/3[日]・5[火] July 3(Sun)-5(Tue), 2016

産学官連携と国際連携
Public-private partnership & International alliance

特別講演
樋口 博彦 (国立精神神経疾患研究センター)
John Krystal (イェール大, USA)

第46回日本神経精神薬理学会 (JSNP) 年会
特別講演
樋口 博彦 (国立精神神経疾患研究センター)
John Krystal (イェール大, USA)

第30回国際神経精神薬理学会 (CINP) ソウル大会
特別講演
山崎 哲人 (東京大学)
Jun Soo Kwon (大邱大, シンガポ)

第 46 回日本神経精神薬理学会年会（2016 年ソウル大会）ポスター

JSNP は、創立当初より基礎と臨床が対等な立場で学会を運営している点が最大の特徴であり強みだと思います。そのような学会は他にほとんどないと思います。日本医療研究開発

機構（AMED）で融合脳事業が進められていることや、延べ会員数 11 万人の脳科学関連学会連合（脳科連）の代表に当時会員数 1300 名ほどだった JSNP の山脇成人先生が選出されたことも、この様な基礎と臨床の連携が最近ますます重要であることを物語っていると思います。基礎と臨床のバランスの取れた連携をぜひ今後も続けていただきたいと願っております。

JSNP には産業界からも多くの会員が在籍していることも、大きな強みだと思います。大塚製薬の菊地哲朗先生が理事などの要職をお務め下さっていることなど、学术界と産業界も対等な立場で JSNP の使命に取り組んでいます。このような関係も今後も続くことを願っております。

JSNP の機関誌である *Neuropsychopharmacology Reports* (NPPR) は、公正な研究が迅速に展開していく上で、大きな貢献をしていると思います。NPPR が今後の学術誌の在り方の手本となることを期待しております。

JSNP は広く社会から信頼されていると思います。関係する事案に厚生労働省などから頻繁に問い合わせがきたり、国際的にも CINP やアジア神経精神薬理学会 (AsCNP) との繋がりが強固であったり、脳科連でも存在感があります。このような社会との繋がりも今後ますます強まることを期待しております。

中枢神経薬の開発が世界的に停滞してきていますが、日本での開発は活発です。2024 年 5 月 23-26 日には東京で CINP 世界大会が開催されます。日本が中枢薬開発や適正使用で世界をリードし、世界の精神神経疾患患者の救済に大きく貢献するためにも、JSNP には今後ますますの発展を期待しております。



日本神経精神薬理学会 2016 年新旧理事会



日本神経精神薬理学会 2018 年新旧理事会

私の精神薬理学と日本神経精神薬理学会への期待

石郷岡 純

CNS 薬理研究所

認定医療法人 石郷岡病院



日本神経精神薬理学会が 50 周年を迎えたこと、本当にうれしく思います。本学会は基礎と臨床が隔てなく研究成果を発表し、議論するという、当たり前のように現実には実現している例は少ない貴重な学会だと思います。まさに、そこにこそ、本学会の存在意義が凝縮されていると言っていいでしょう。私がずっとこの学会に関わり、2015 年の一般社団法人化の際には理事長まで務めさせていただきご縁に巡り合ったのも、私の中の精神薬理学のイメージと本学会が、しっかりとシンクロしていたことが背景にあったと感じています。そこで、きわめて個人的な話にはなりますが、私の思っている精神薬理学への思いを、この機会をお借りして少しだけ披露いたします。

私は精神科医ですが、精神薬理学に関心を持ったきっかけは、1970 年代の学生時代に精神疾患について学んだ際、「どうしてこころの病気が化学物質である薬で治るのだろう」という素朴な疑問が湧いてきたときでした。その疑問は、薬の働き方を知りたいという欲求に変わり、大学院で基礎的な精神薬理学の道を歩み始めました。当時の研究の中で学び得た教訓は、測定法はどうあるべきか、どうすれば科学的な説明が可能になるのかといった方法論や推論・論理の厳格性・重要性でした。また、同時に臨床医として治療にあたっていると、化学物質がこころの病気を治すという不思議さをますます実感するようになっていきましたが、実験室でやっていることと臨床の間をどのようにして繋げたらいいのか、皆目見当がつかないことにある種のいら立ちを感じていました。当時は **bench-to bedside** という便利な言葉もない時代で、そのもやもや自体をどう表現していいかさえわかりませんでした。そういう時本学会の存在を知り、まさにわが意を得たりという思いで入会し、今日までお世話になり続けてきました。また、私にとって幸運だったのは、当時所属していた北里大学の精神科で多くの治験が行われるようになり、そのお手伝いをする機会が年々増えていったことでした。その中で、製薬会社の方々と知己も得ることができ、新薬の開発がいかに大変なプロセスであるか身をもって経験することができました。本学会での活動とこうした新薬開発の経験の中で、ようやく基礎と臨床のシームレスな繋がりとという大きな課題に対して、自分なりの考え方が身についていったことは、今も私の大切な財産となっています。

最後に、「基礎と臨床の連携」という思想をさらに深めるために、将来この学会を背負って立つ方々に頭の片隅においてもらいたいテーマについて触れたいと思います。基礎の研究者も臨床の研究者も使う思考法は科学です。領域によって用語の理解が難しくても、

その思考プロセスは共有できますし、だからこそ本学会の発展もあったと思います。今後バイオマーカーの開発などが進めば、ますます基礎と臨床の隙間は埋まっていき、両者の違いは小さくなっていくでしょう。しかし、科学者は科学では解明できない、あるいはできそうもないテーマについては無視するか先送りしてしまい、今できることをやるという行動パターンをとりやすい人種です。例えば、将来幻聴が生じるメカニズムは完全に解明され、その治療も今よりはるかに進歩した時代が来るでしょう。しかし、ここまでで思考が止まってしまい、より大きなテーマに取り組まない姿勢のことを科学の「イージー・プロブレム」と言います。しかし、本来はさらにその先にある、「なぜ幻聴は被害的なのか」といった哲学的な課題（ハード・プロブレム）が残されています。現状の科学はまだその段階まで踏み込んで解明しようという形になっていませんが、私たちが携わっている学問領域にはこうしたテーマもあるのだという認識を忘れず、この学会が将来こうした議論もできる場に発展していくことを夢見ています。

2006年三学会合同大会の思い出：鍋島先生とご一緒に初の全国学会大会長

尾崎 紀夫

名古屋大学大学院医学系研究科精神医学・
親と子どもの心療学分野



日本神経精神薬理学会(JSNP)創立 50 周年、誠にお目出度うございます。私が初めて全国学会で発表をさせて頂きましたのは 1985 年の JSNP が正式に発足した年に開催された京都大会で、以来 35 年の長きにわたり、研究人生の全てが本学会とともにあり、本当に多くの事を学ばせて頂きました。改めて御礼申し上げます。

私にとって JSNP 関連の多くの方々と研究、臨床、教育をご一緒に参りましたが、JSNP と言えば、何より鍋島俊隆先生が思い浮かびます。私が、1990 年、名古屋大学で博士号を取得する際の副査が鍋島先生（主査は永津俊治先生）でした、博士号のテーマは MPTP パーキンソンモデルラットのマイクロダイアリス法を用いた解析で、それ以外にもドパミンアゴニストやメタンフェタミン投与、脳内自己刺激行動時の脳内変化をマイクロダイアリス法で解析しており、一連の神経精神薬理研究に関して鍋島先生から色々ご指導を頂き、自分では「鍋島先生の弟子の一人」と考えておりました。

その後、2000 年から 5 年間、鍋島先生が代表で、科学技術振興調整費目標達成型脳科学研究「依存性薬物による精神障害の機構の解明の研究」が採択され、私も班員の一人として参加させて頂き、多数の班員を束ねる大型研究の統括、随行者としてご一緒した評価委員会での質疑、といった鍋島先生のお姿に接して、多くを学ぶことが出来ました。

第28回 日本生物学的精神医学会
第36回 日本神経精神薬理学会
第49回 日本神経化学学会 合同年会

BP
NP
NC

Joint Meeting of
the 28th Annual Meeting of the Japanese Society of Biological Psychiatry,
the 36th Annual Meeting of the Japanese Society of Neuropharmacology,
the 49th Annual Meeting of the Japanese Society for Neurochemistry

分子から読み解く精神機能と疾患

平成18年
9月14日(木)―16日(土)
名古屋国際会議場 〒456-0036 名古屋南田原町四丁目1番1号
TEL.052-883-7711 FAX.052-883-7777

■プレナリーレクチャー
Arvid Carlsson
(Professor, Sahlgrenska Academy University of Göteborg)
利根川 進
(マサチューセッツ工科大学ヒコワラー学習記憶研究所 教授)

■招待講演
Nancy C. Andreasen
(Professor, Andrew H. Woods chair of Psychiatry, The University of Iowa)
廣川 信隆
(東京大学大学院医学系研究科分子細胞生化学専攻 教授)

■シンポジウム
統合失調症の脳病理は進行するか? Epigeneticsと精神疾患の成り立ち / エピジェネティクスを利用したゲノム研究、神経生物学的分子機構、薬理学的アプローチ、統合失調症と神経伝達物質、薬物依存症の分子機構、不安障害の生物学、薬理、生体防衛機構と精神疾患、統合失調症の発症準備の脳機構、うつ病慢性化・難化の生化学、統合失調症モデルを用いた行動科学、アスファルテン―神経伝達物質、脳神経を用いた生体機能の解析、精神神経疾患の病態解明への脳神経分子から脳全体まで

演題募集などは下記ホームページをご覧下さい
<http://www.secretariat.ne.jp/bp-np-nc2006/>

共催 財団法人 精神・神経科学振興財団

会長

第28回日本生物学的精神医学会
会長 岡崎 祐士
三重大学大学院医学系研究科
神経の発生学・神経精神学分野 教授

第36回日本神経精神薬理学会
会長 尾崎 紀夫
名古屋大学大学院医学系研究科
精神医学分野 教授

第49回日本神経化学学会
会長 鍋島 俊隆
名古屋大学大学院医学系研究科 教授
医学部附属脳神経学講座

事務局

第28回 日本生物学的精神医学会事務局
三重大学理学部心理学 174
三重大学大学院医学系研究科 神経の発生学・神経精神学分野

第36回 日本神経精神薬理学会事務局
名古屋大学大学院医学系研究科 精神医学分野 (神経医学専攻)

第49回 日本神経化学学会大会事務局
名古屋大学大学院医学系研究科 医学部附属脳神経学講座

お問合せ

三学会合同年会運営事務局
株式会社 三学会合同年会事務局
〒466-0003 名古屋市中区栄5-32-20 朝日生命南堀ビル
TEL.052-262-5070 / FAX.052-262-5084
e-mail:bp-np-nc@secretariat.ne.jp

演題応募
開始
平成18年
3月28日(火)
締切
平成18年
4月27日(木)

その間、2003 年からは名古屋大学の教授としてもご一緒して、藤田保健衛生大学（当時）から異動して不案内な私に、学内の事柄を懇切にご教示頂きました。

その後 2006 年に、鍋島先生からのお声掛かりで、「名古屋で、日本神経化学学会の大会長を鍋島先生、日本生物学的精神医学会の大会長を当時三重大学教授の岡崎裕士先生、さらに JSNP の大会長は尾崎で、初の三学会同大会を開催しよう」との話になりました。私は名古屋大学異動後、徐々に慣れてきたとは言え、学内で精神科だけは、かつての大学紛争の混乱を当時も残しており、そんな状況で「JSNP の大会長が務まるのだろうか」と、心配になり、鍋島先生にご相談しました。鍋島先生は何時もの笑顔で、「尾崎君大丈夫、僕に任せなさい」とのお言葉に、全面的に甘えて、初の全国学会大会長をお引き受けすることに致しました。

「三人寄れば文殊の知恵」、「三本の矢の教え」という言いまわしもございます。ところがどうして、準備段階で異なるベクトルが発生して、尾崎と当時の新田淳美准教授（現、富山大学教授）はハラハラして、途方に暮れたこともあるのですが、大会が近づき、いざとなれば鍋島先生の実行力とリーダーシップは余人をもって代え難く、私は本当に何もしないままに、大会は開催され、無事終了して、あっけにとられておりました。

鍋島先生、新型コロナウイルス以来、ご一緒する機会もなく、（お酒が若干過ぎた鍋島先生を）ご自宅やホテルの部屋までお送りする機会がないのが残念です。何時までもお元気で、ご指導のほど何卒よろしくお願い申し上げます。



三学会同大会懇親会：三大会長（左から鍋島先生、岡崎先生、尾崎）

精神薬理談話会の思い出

加藤 信

かとうメンタルクリニック



今年は、日本神経精神薬理学会 50 周年記念の事業がいくつか行われ、本稿もその記念誌に掲載されるとのことである。これを書いている時点で covid-19 がわが国でも猖獗し、先の見えないう陰鬱な日々が続いている。50 年前のことを振り返ってみると、世の中は学園紛争の真っただ中で、三島由紀夫の割腹自殺などもあり、騒然とした雰囲気にも包まれていた。しかし、当時のわが国は高度経済成長を続けており、街は大勢の若者であふれ、世間には明るさと活気が満ちていた。世界を見渡せば、東西冷戦にベトナム戦争、アメリカにはヒッピーが増え、ドラッグカルチャーが関心を引いていた。そんなころに精神薬理談話会が発足し、後に日本神経精神薬理学会に発展することになる。

精神薬理談話会の発足

1968 年、小林司先生（当時・神経研究所）の編著による「新精神薬理学」という本が医学書院から出版された。この本をご覧になった岩原信九郎先生（当時・東京教育大学助教授）が、1970 年の後半ごろ小林先生に「精神薬理談話会」設立の話を持ちかけられた。小林先生は柳田知司先生（当時・実験動物中央研究所部長）も発起人に加えることを提案され、結局このお三方が世話人となり、精神薬理談話会（以下、「談話会」と略）の第 1 回会合が 1971 年 3 月 20 日に、神経研究所の会議室で開催された。発足当時の会員数は 34 名、東大精神科の臺弘教授、慶大薬理の細谷英吉教授など、錚々たるメンバーであった。

岩原先生編集の「精神薬理談話会ニューズレター 第 1 号」に再録された「会員募集のお知らせ」は次のようなものであった。

精神薬理学は、精神医学、薬理学、心理学等、多くの分野の臨界領域として発達してきたために、これを学ぶ人たちにとって「共通の話し合いの場」がないといわれてきました。

そこで、ごく内輪の人たちだけで、集談会ないし勉強会を作ろうということになりました。

この会は、話し合いの場を作ろうというだけのものですから、かたくなしい会則とか、会長その他の役員も設けず、ただ集会を開くためだけに必要な世話人だけを、まわりもち（たとえば、任期 1 年、重任せず、前任者の指名で決定）で、3 人ほど決めておけば充分かと思っています。（中略）入会資格として（中略）2 篇以上の（中略）関係論文、（中略）会費は暫定的に 500 円（中略）とりあえず別記のような第 1 回の集まりを開きます。その時に皆さまのご意見をおきかせいただければ幸いです。

1971 年 2 月 17 日

岩原信九郎（東教大、心理）

小林 司 (神経研、精神薬理)

柳田知司 (実中研、医学研)

会則も会長もないような会では、今なら預貯金の通帳すら作れないので、なんともおおらかな時代だったと思う。筆者は、医学部卒業直後の1971年4月から小林先生のところに研究生として弟子入りしたので、第1回集会には残念ながら出席していない。このときの様子をよくご存じで今でも健在の方は、当時、実験動物中央研究所の安東潔先生ぐらいのものではないだろうか。

精神薬理談話会の活動

談話会の設立当初、活動として抄読会、合宿、学術集会、講習会等が企画された。

抄読会は1971年の5月を第1回としてその後ほとんど毎月のように神経研究所の会議室で開催され、この連絡係を筆者が担当した。専門分野の異なる方々の集まりであったので、お互い学ぶことが多かったものと思われる。心理では「静注」の意味さえすぐには分からないという話を聞いたし、筆者はオペラントが何のことやらわからず苦勞した。

研究発表を中心としたインフォーマルな学術集会は、神経研究所・晴和病院の講堂で毎年1回行われるようになった。これは、本学会の年会として現在に至っている。

談話会発足当時からの懸案であった合宿は、群大行動分析の田所作太郎先生のお世話で1975年から開催されるようになり、記憶は定かでないが田所先生の定年退職のころまで続いた。この合宿には、抄読会の常連に加えて遠く九州や名古屋からの参加もあり、会場が禁酒だったのは残念であるが、3日も寝食を共にするうちに、皆がとても親しくなり、筆者も多くの友人を作ることができた。

以上のようないわば手作りの期間をへて談話会は大きく発展し、研究会からさらに学会となって現在に至っていることはご存じの通りである。

参考資料

加藤信：日本神経精神薬理学会草創のころ。日本神経精神薬理学雑誌、21:45,2001.

日本精神神経学会百年誌編集委員会：日本精神神経学会百年誌資料編(関連学会の項)、p 281, 2003.

加藤信：精神医学放浪記。文月会誌(新潟大学医学部首都圏同窓会交流会誌)、第2号、p24, 2007.

加藤信：日本神経精神薬理学会と新潟大学医学部。学会会報(新潟大学医学部同窓会報、創立百周年記念号)、p 135、2010.

加藤信：追悼・小林司先生。日本神経精神薬理学雑誌、32:126,2012.

加藤信：奇縁なり！ 真壁禄郎先生と三船敏郎氏との出会い。学会会報(新潟大学医学部同窓会報)、99号、p 24、2013.

CINP/JSNP 合同向精神薬開発 PPPs タスクフォースワーキンググループの活動に参加して

菊地 哲朗

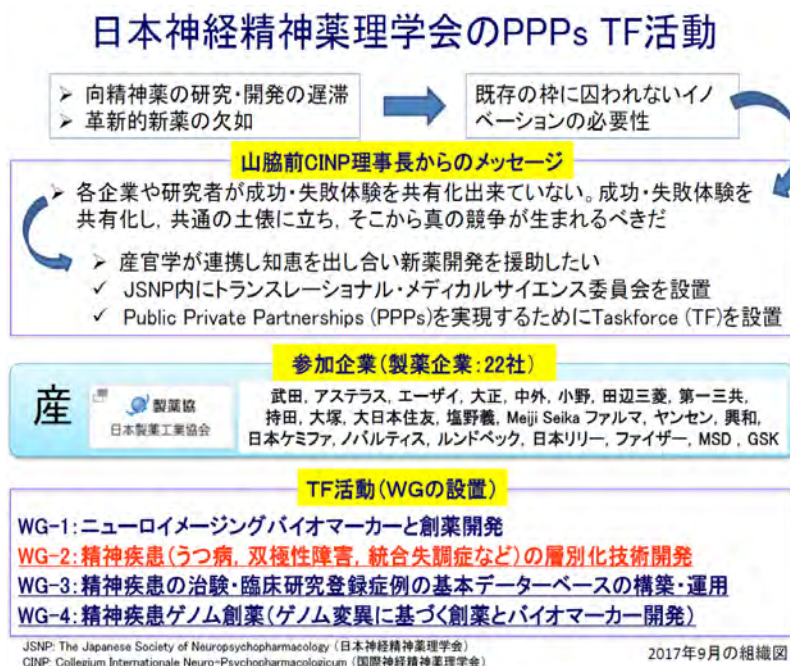
大塚製薬株式会社 医薬品事業部



日本神経精神薬理学会の50周年、本当におめでとうございます。この学会に理事、執行委員として参加させていただき、色々な思い出があります。とくに私にとっての思い出は、やはり CINP/JSNP 合同向精神薬開発 Public Private Partnership (PPPs) タスクフォースワーキンググループの活動に参加させていただいたことです。この活動による私の学びと経験は非常に大きかったので、この話を紹介させていただきたいと思います。

1. CINP/JSNP 合同向精神薬開発 Public Private Partnership (PPPs) タスクフォースワーキンググループの発足

事の始まりは、当時 CINP の理事長であった山脇成人先生のリーダーシップによって、2015 年 4 月 21-22 日に東京で開催された CINP CNS Drug Innovation Summit にありました。この Summit にはグローバルから CINP 関係者が多数参加し、CNS の創薬研究、臨床開発、そして PPPs について議論しました。この Summit が CINP/JSNP 合同 PPPs タスクフォース立ち上げの先駆けとなったわけです。



この後、山脇成人先生、池田和隆先生（東京都医学総合研究所）らが中心となり PPPs タスクフォース設立準備会議が同年 5 月 23 日に東京で開催されました。そして同年 7 月 16 日に PPPs タスクフォース全体会議が東京で開催され、①イメージングバイオマーカーの検証（WG-1 委員会）、②精神疾患の層別化技術開発（WG-2 委員会）、③治験・臨床試験データ症例基本データベース化（WG-3 委員会）の 3 つの WG の立ち上げが正式決定され、8 月にそれぞれの WG がキックオフ会議を開催し、活動内容の確認と決定を行いました。その後に精神疾患ゲノム創薬の調査活動を実施する WG-4 委員会も加わり、2017 年 9 月にはアカデミアに加えて参加企業が 22 社にのぼる大きな JSNP の PPPs タスクフォース活動組織へと発展しました（前頁の図を参照）。

2. WG-2 委員会の活動

私は WG-2 委員会に所属していました。WG-2 委員会の調査活動の目的は、「精神疾患の層別化技術開発」でした。そして、特にアメット・メディカル・ニーズの高いうつ病を取り扱うことになりました。目指す内容は、(1)既存薬が反応する「うつ病のサブポピュレーション」を層別化することを可能にする層別因子（バイオマーカー）の仮説、あるいは(2)既存薬が反応しないアンメット・メディカル・ニーズと言われる「うつ病のサブポピュレーション」を層別化することを可能にする層別因子（バイオマーカー）の仮説を立て、それらの検証臨床試験デザインを立案し検証を目指すことでした。期待される成果としては、(1)既存薬が反応するうつ病サブポピュレーションを特定でき、予め反応を予測できるうつ病サブポピュレーションに対して既存薬を有効に処方できる。あるいは、(2)既存薬が反応しないうつ病サブポピュレーションへの新たな抗うつ薬の創薬、治験の実施を可能にするでした。今、考えてもとてもハードルの高い目標でしたが、下記のメンバーと共に、多い時期は1ヶ月～2ヶ月に一度は東京に集まり、色々な意見を戦わせ、皆で調査活動を続けました。

WG-2委員会メンバーリスト（2018年4月）		
	氏名	所属
TF委員長	山脇成人	広島大学
WG委員長	菊地哲朗	大塚製薬
WG副委員長	加藤忠史	理化学研究所
WG委員	池田和隆	東京都医学総合研究所
	井筒美和	ヤンセンファーマ
	井上 猛	東京医科大学
	大森哲郎	徳島大学
	梶井 靖	ノバルティスファーマ
	中田恵理子	日本ケミファ
	成田裕保	ルンドベック
	西川 徹	東京医科歯科大学
	橋本謙二	千葉大学
	松村多可	イーライリリー
	藪内一輝	大日本住友製薬
	吉村玲児	産業医科大学
	温 恵子	MSD

うつ病を対象とした層別化技術開発：10年間（平成31～40年度）の研究計画骨子

WG-2の目的

- ▶ **バイオマーカー研究開発およびAI技術応用**によって、**既存の抗うつ薬が奏効する、あるいは奏効しない大うつ病性障害の各サブpopulationを層別化し新しいうつ病疾患を分類**する

背景

- ▶ 大うつ病性障害を対象としたプラセボ対照二重盲検比較試験で、既存の抗うつ薬SSRI/SNRIの治療反応性の経時的な推移を検討した研究によると、SSRI/SNRI治療群はプラセボより有意な改善を示す群と、**プラセボより反応性が明らかに悪くほとんど改善していない群が存在する** (Arch. Gen. Psychiatry 68:1227-1237, 2011.)
- ▶ 精神疾患の中でもとくに大うつ病性障害は異種性が高く、**既存薬が奏効する大うつ病性障害を層別化できるバイオマーカー、あるいは既存薬が奏効しない大うつ病性障害のバイオマーカーの研究開発が強く望まれている**

『バイオマーカー研究開発、AI技術応用』とその成果

従来の診断医療

うつ病の
フェノタイプ診断

既存の抗うつ薬
への反応患者
75%

非反応患者 25%

- ・ **バイオマーカー研究開発**
- ・ **AI技術応用**

バイオマーカー検証のための
前向き臨床試験
(AI技術応用, 10年間)

目指す診断医療

新しいうつ病
疾患分類

既存の抗うつ薬
で治療可能な
うつ病 A

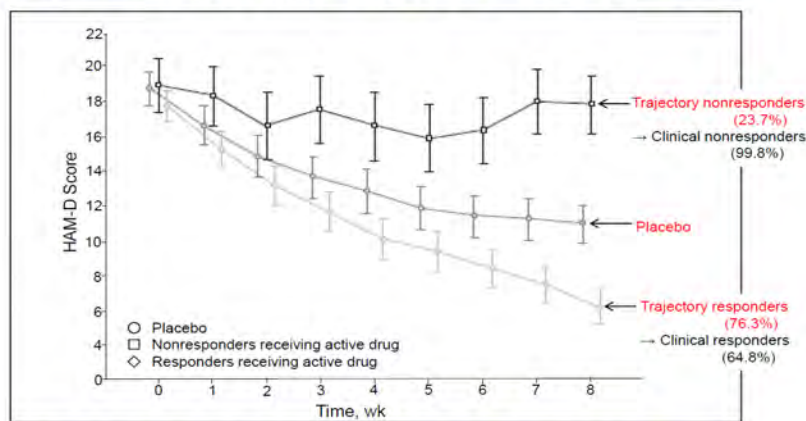
治療不可の
うつ病 B

<成果>

AI開発
層別化技術開発
治療反応性予測

- ・ 既存薬の適正使用
- ・ 医療費の削減
- ・ 世界に先駆けて、アンメット・メディカル・ニーズへの創薬研究の具現化
- ・ 臨床試験実行性の確立

7本のプラセボ対照二重盲検ランダム化比較試験を対象にしたSSRI/SNRIの治療反応性の経時的な軌跡



7本のランダム化比較試験結果(n=2515; 実薬, 74%; プラセボ, 26%)を、growth mixture modelingで解析した結果
(Arch. Gen. Psychiatry 68:1227-1237, 2011.のFigure2を引用、一部改編)

実際の活動の中では、大うつ病性障害が異種性の高い疾患であることより、本邦で過去に実施された大うつ病性障害におけるプラセボ対照二重盲検比較試験を対象に、既存薬（SSRI/SNRI など）の効果を予測および修飾する患者側因子の同定を試みる研究を実施しました。この研究目的の為、日本で実施された8本のプラセボ対照二重盲検比較試験の個人データベース[総症例数 n=3,701：実薬 2,486 (67%)、プラセボ 1,215 (33%)]の個人データの移管を関連製薬企業が了承してくれたことは非常に大きかったと思います。この個人データ・メタアナリシス研究を進めるための運営委員会が立ち上がり、京都大学の古川壽亮先生を中心として研究活動が進められ、今も継続しています（2020年4月15日現在、6文献公表）。

日本で行われた抗うつ薬の治験の個人データを利用した 個人データ・メタアナリシス研究

運営委員会 (Steering Committee)

氏名	所属	備考
山脇 成人 (委員長)	広島大学	元CINP理事長
石郷岡 純	CNS薬理研究所	元JSNP理事長
池田 和隆	東京都医学総合研究所	前JSNP理事長
古川 壽亮 (副委員長)	京都大学	
渡辺 範雄	京都大学	
田中 司朗	京都大学	
野間 久史	統計数理研究所	
丸尾 和司	国立精神・神経医療研究センター	
Andrea Cipriani	Oxford大学	
岡本 泰昌	広島大学	

作業部会

氏名	所属	備考
吉野 敦雄	広島大学	
今井 必生	京都大学	
篠原 清美	京都大学, Oxford大学	

調査活動を大きく発展させるためには、公的資金の導入が必要でした。その為に、山脇成人先生、中込和幸先生（NCNP 病院長、現 JSNP 理事長）、池田和隆先生、小居秀紀先生（NCNP）、森尾保徳先生（現 NCNP）らが中心となって、内閣官房の健康医療戦略室、厚生労働省障害保健福祉部精神・障害保健課、文科省研究振興局ライフサイエンス課、日本医療研究開発機構（AMED）へ、陳情説明の為、何度も足を運んでいただきました。そのような地道な活動を継続していただいたことが、現在になっても各当局へ事業提案を相談できる関係維持に繋がっています。



PPPs タスクフォース全体会議（日本医療研究開発機構 初代理事長 末松誠先生ご出席）

3. 次への展望について

JSNP のトランスレーショナル・メディカル・サイエンス委員長のお立場でも活動を続けられていた石郷岡純先生（CNS 薬理研究所）より「評価バリエーション軽減のための中央評価システムの構築」のご提案がされました。本来は、抗うつ薬を始めとする治験薬の薬効評価の成功確率を上げることを目的としたものですが、そもそもバイオマーカーを評価するうえでも根本的な課題でありました。すなわち、層別化するバイオマーカーを特定するには再現性のある安定したうつ症状の評価システムが必要だからです。WG-2 委員会としてもその事業に参画させていただくことになりました。現在では、森尾保徳先生がトランスレーショナル・メディカル・サイエンス委員長になられ、参画する製薬企業のカウンターパートをされています。実務においては、NCNP の住吉太幹先生、中込和幸先生、小居秀紀先生、森尾保徳先生らが中心となって準備されています。具体的には、複数の製薬企業より資金援助を受けまして、評価バリエーション軽減のための中央評価システムの構築を目指した「予備的な臨床評価試験」の準備に入っています。「予備的な臨床評価試験」とは、施設で評価者が患者と対面の上 MADRS 評価した場合（従来の評価方法）と、遠隔地から情報通信機器を介して評価した場合（中央評価）との一致度を確認する試験になります。そして、その上で「従来法と中央評価との比較による中央評価システムの検証+バイオマーカー候補の探索試験」とその後の「バイオマーカー検証試験」については当局に提案予定です。前者の「従来法と中央評価との比較による中央評価システムの検証+バイオマーカー候補の探索試験」は、可能であれば現在予備試験に参画している製薬企業に新たな製薬企業を含めた産学官連携コンソーシアムを構築し、NCNP を中心としたアカデミアと一緒に、公的資金への応募を当局に相談して行く構想になっています。

4. 終わりに

WG-2 委員会については、山脇成人先生にご相談した結果、WG-2 委員会として一定の役割を終えることができたとの理解のもと、この段階で閉じるのが良いだろうということ

になりました。こうして、この2020年3月末を持って、WG-2委員会は解散させていただきました。思えば、2015年4月に山脇成人先生（当時、CINP理事長）の強いリーダーシップのもと、東京で開催されたCINP CNS Drug Innovation Summitから始まり、同年8月に東京で開催されたPPPsタスクフォースWG-2委員会のキックオフ会議から約5年が経過としています。この間、私は普通に製薬企業に在籍するだけでは学べない多くの事を学ばせていただきました。関係者の皆様には、この間、WG-2委員会の活動に従事していただけたこと、本当に感謝しております。また、この5年間皆様と活動できたことは私にとっても本当に楽しいことでした。今後は大塚製薬株式会社の中核研究開発部門の窓口として、引き続き「評価バリエーション軽減のための中央評価システムの構築」はもとより、「バイオマーカー検証試験」に関わって行きたいと希望いたします。

今後とも、どうぞよろしくお願い申し上げます。

日本神経精神薬理学会への感謝と期待

喜田 聡

東京大学大学院農学生命科学研究科



私が初めて日本神経精神薬理学会に参加したのは、2008年に品川プリンスホテルで開催された第38回年会でした。シンポジウム「恐怖記憶の分子メカニズムからみた PTSD の病態と新たな治療戦略」において講演する機会を頂きました。当時、恐怖記憶再固定化と消去のメカニズムの解析の研究を進めながら、PTSD 治療への応用を暗中模索していましたが、臨床研究の先生方も集う学会で発表するのは初めてのことでした。オールドルーキーではありましたが、新鮮な気持ちで、また、緊張しながら会場に向かった記憶が残っています。

あれから十数年が経過し、私にとって本学会はすっかり馴染みの学会となっております。この学会の一番の特徴は、臨床研究と基礎研究が同じ土俵で発表しあい、議論できる点と感じております。基礎研究者にとっては、この学会に来れば臨床研究の視点を学ぶことができます。この点は非常に重要なことで、基礎研究者同士で臨床応用を論じていても、堂々巡りが起こったり、実用性を欠くことがありがちなのですが、臨床側からのご意見を聞くことで、今やっている研究が少しでも現実的なのか（無駄なことをしていないか）顧みることができます。多分、臨床研究に携わっている先生方も、逆の立場から同じような感じを抱かれているのではないのでしょうか。

1990年代の終わり頃から、恐怖記憶と PTSD の関連性が話題に上るようになりました。その頃、私が行っていた恐怖記憶機構の解析が PTSD の病態や治療方法開発に少しでも役立つものなのか、臨床サイドからの本音や意見を聞きたかったのですが、私が参加する学会は国内でも海外でも周りは基礎研究者ばかりでした。このため、「PTSD の原因は恐怖（トラウマ）記憶が強烈過ぎるからなのか、あるいは、消去障害のためなのか」といった基礎研究者目線の疑問を投げかけたかったのですが、なかなかそのような機会が訪れませんでした。幸い、今では、日本神経精神薬理学会において、臨床の先生方とも、共通の言葉を使って、活発に議論ができるようになっております。このような状況が国内に生まれたことにおいて、本学会が果たした役割は非常に大きいと感じております。

日本神経精神薬理学会に誘って頂いた池田和隆先生には大いに感謝しております。私がコールドスプリングハーバー研究所でポスドクをしていた時に、池田先生が研究所主催の実験コースに参加され、その時初めて池田先生にお会いしました。大学も同期であることがわかり、滞在された数週間の中に、研究所内の食堂やバーで 1 ドルのバドワイザーを片手

に夜な夜ないろいろお話しできたことは、留学時代の楽しかった思い出の一つとなっています。もしあの時の出会いがなかったら今どうなっていたかと思うと、とても感慨深く感じます。

この学会の長い歴史からすれば、私が携わった期間はせいぜい全体の四分の一程度に過ぎません。しかし、様々な学会に参加しているものの、この学会の個性は際立っているように感じています。今後も、アカデミックな観点からは、基礎と臨床の研究者の橋渡しの場となり、相互理解と、その後の連携が進む機会を提供して頂ければと願っております。一方、個人的には、年会における趣向の凝らされた懇親会がとても楽しみで、他の学会にはない自由さと、昼と夜の硬軟のギャップをいつも面白く感じています。

最後になりますが、日本神経精神薬理学会の五十周年を心よりお祝い申し上げます。今後も、臨床と基礎を両翼とする学会として日本のサイエンスを牽引する学会であることを祈念申し上げます。

日本神経精神薬理学会のご縁があつてこそ

北市 清幸

岐阜薬科大学 薬物動態学研究室



日本神経精神薬理学会 (JSNP) の 50 周年に際し、お祝いを申し上げますと共に、50 周年を大変喜ばしく思っている者の一人として筆を執らせて頂きました。

JSNP に関わるきっかけとなったのは何といても恩師、鍋島俊隆先生との出会いです。岐阜薬科大学で免疫関連の研究で修士を取めた後、ご縁があつて名古屋大学に赴任されて 2 年目の鍋島先生の元でお世話になることとなりました。1991 年のことです。研究室には新田淳美先生 (富山大学) が在籍されていました。鍋島先生の薫陶を受け、素晴らしい成果を出す彼女のまぶしい姿に私も研究者として頑張らねばと思った記憶が蘇ります。鈍重な私はすぐに成果を出すことが出来ませんでした。1993 年の東京での JSNP 年会で PCP 誘発常同行動に関する発表をしたことが、この学会とのご縁となりました。また、翌年の CINP (ワシントン DC) でも成果を発信する機会を得ました。この間、鍋島先生にご縁を結んで頂き、山本経之先生 (九州大学、長崎国際大学)、鈴木勉先生 (星薬科大学)、山脇成人先生 (広島大学)、同年代の成田年先生 (星薬科大学)、船田正彦先生 (国立神経精神セ)、池田和隆先生 (東京都医学総合研究所) など多くの先生方と親交を持たれたことが自らのその後の研究者としての人生にこれほどまでに大きな影響を与えるとは当時思ってもみなかったところです。

その後、学位を取得し、1995 年から 2 年間の McGill 大学の Dr. Quirion ラボへの留学の後、名古屋大学に職を得て戻ってきました。以降、9 年半の名大時代には、鍋島先生のお誘いを受け、厚生省の研究班で覚せい剤依存の研究を行いました。この研究班在籍時に行ったトランスポーターに関する研究が今の薬物動態学研究につながる事となりました。ここでも、成田先生、船田先生、浅沼幹人先生 (岡山大学) らと親交をさらに深めることが出来ました。また、薬物依存関連の SNPs 解析の研究では尾崎紀夫先生 (名古屋大学) のお世話にもなりました。

2004 年にはまさしく JSNP のご縁で、研究や人生についていつもご助言を頂いていた山本経之先生のお誘いを受け、先生が新たに主宰される長崎国際大学薬学部薬理学研究室に助教授として赴任しました。多忙な新設私学薬学部での研究はままならないことも多かったのですが、平仁田尊人先生 (フロリダ大学)、縄田陽子先生 (長崎国際大学) と研究を行えたことは良い思い出です。また、山本先生のご縁で高田孝二先生 (帝京大学)、岸岡史郎先生 (和歌山医大)、本誌を総括されている廣中直行先生とも親交を深めることが出来たのもこの頃です。

その後、2 年間の大学病院薬剤部での勤務を経て、2013 年からは母校の岐阜薬科大学で

教授として奉職することとなりました。ようやく自らラボを持つことが出来、何かしら JSNP に恩返しをしたいと思っていたところ、2014 年からは広報委員を、2018 年にはウィーンで開かれた CINP での JSNP 主催アジアナイトの担当幹事を拝命、2019 年からは図らずも JSNP の理事、総務委員長を拝命し、現在に至っています。

履歴書のようになってしまいましたが、ここに書いたように JSNP に関わられている多くの先生方のご助力が無ければ今までの私も今の私もなく、25 年以上関わってきた私の愛すべき学会、JSNP には感謝しかありません。

50 周年を迎えた JSNP にはウィズコロナ、ポストコロナ時代の荒波にも負けず、さらに発展することを心より祈念しております。私も引き続き、微力ながら JSNP に貢献したいと思えます。また、これから研究者を目指す後進の皆様には人財豊かな JSNP での素晴らしい仲間、先生方との出会いと交流によって、洋々たる前途が開かれることを心より願っています。

50周年を振り返って

佐藤 光源
(名誉会員)



日本神経薬理学会が創立50周年を迎え、関連学会の合同開催や国際的な活動など大きく発展していることを心からお祝いします。

懇話会時代から関わってきましたので、50年の年月に深い感慨を覚えます。学会発足のころから覚せい剤精神病の逆耐性現象やてんかんのキンドリング現象を、臨床面では統合失調症のドーパミン仮説や精神科薬物療法についてとりあげてきましたし、国際的にはCINP（ニースなど）やACNP（ハワイ、プエルトリコ）、CCNP（バンクーバー）や韓国神経精神薬理学会（ソウル）などの合同会議に参加したので思い出は尽きません。なかでも印象に残る二つを取り上げたいと思います。

一つは学会が発足する頃のことです。当時は薬物依存関連の発表が多く、田所先生、柳田先生や実中研の先生方が中心になって熱心な討論が繰り広げられました。私は覚せい剤精神病的臨床研究で、慢性使用中にしだいに精神病エピソード（統合失調症と鑑別不能）が出現し、寛解しても再発しやすさを残し、少量の覚せい剤やライフストレスで急速に再発することに注目し、逆耐性現象として精神医学領域で報告し、その経過上の特徴をネコの実験で検証しました。その結果を神経精神薬理の懇話会でも発表したところ、それは感作(sensitization)ではないかと主張する柳田先生と逆耐性でよいとする田所先生と大いに議論したものです。私のいう逆耐性現象は臨床的な概念で、統合失調症の精神病エピソードの基盤をなす生物学的脆弱性Vulnerability(trait)を研究しようというものであり、病像を構成する多くの行動成分が感作と耐性を獲得しながら精神病像の出現に至るというもので、今も変わりません。しかし近年、アメリカでは感作が重視され、依存症も診断分類から消え、薬物精神病も急性中毒モデル中心となっています。慢性中毒の概念は欧州には残っていますが日本特有の慢性中毒概念であり、統合失調症のtraitを研究する重要な手がかりです。薬物依存も深刻な社会問題ですし、重要な研究課題であることに変わりありません。

もう一つは私が東北大学に赴任したあと、第17回CINPのサテライト シンポジウム(1990)を仙台で開催したことです。アメリカ精神医学会のAndreasen教授とvan Kammen教授を招いて統合失調症の再発・慢性化を取り上げましたが、東北から精神分裂病研究会の発展の大きな力になったと思います。また、覚せい剤精神

病の逆耐性現象が欧米に普及するきっかけにもなりました。

精神疾患の治療が1950年代の抗精神病薬の開発で画期的な展開をみせ、その薬理学的な作用機序の解明で病態の科学的な理解が深まったのは歴史的な事実です。精神疾患の診断、病態生物学や新たな薬物療法の進歩にとって、神経精神薬理学は最も重要な研究領域の一つです。精神疾患の研究成果は科学的な妥当性と臨床的な有用性の両面から評価されますが、本学会の臨床・前臨床・基礎研究という学際的な特徴を活かして、これからも大いに発展されることを期待しています。

精神薬理学と伴に

鈴木 勉

湘南医療大学



私は星薬科大学大学院修士課程修了後に製薬企業の研究所に就職したが、学位の必要性を痛感して1976年に母校の大学院博士課程に入学した。この大学院生活動において、日本神経精神薬理学会の母体である精神薬理談話会とその抄読会に参加して、多くの刺激を受けたので欠かさず参加した。その中で、抄読会を担当していた加藤信（清和病院）始め、安東潔（実中研）、岩崎庸男（中外/筑波大）、上岡利春（三共）、高田孝二（実中研）などの先生方と知り合うことができ、多くの学びがあった。この抄読会を約7年間担当された加藤が清和病院から実中研に異動することになり、抄読会の会場を星薬科大学に移し、鈴木が運営を引き継いだのが1979年1月であった。以来10数年間に渡って多くの先生方に抄読会において講演や論文紹介をして頂き、多くの仲間と共に精神薬理を深めることができた。特に、この間五反田の会場から遠く離れた筑波大学心理学から毎回多くメンバーに参加頂いたのは、大変心強く、抄読会継続の原動力になった。

研究面では当初、モルヒネやベンゾジアゼピン系薬物の身体依存の研究に取り組み、その後は依存性薬物に対する欲求について研究を行った。本学の心理学研究室河合貞子教授と共同研究を行い、薬物に対する欲求を実験的に証明するために重り牽引法を開発した。本法に用いた装置は夏目製作所の協力を得て作製し、依存性薬物に対する摂取欲求を重りに変換することにより量的評価を可能にした。また、研究室ではモルヒネなどの依存性薬物を粉末飼料に混入して身体依存や嗜好性を検討していたので、この摂餌パターンを解析するために自動摂餌測定装置を開発した。さらに、1984-1986年の米国留学時のセミナーや共同研究者との議論から発想し、帰国後に取り掛かったのが、条件づけ場所嗜好性試験（CPP）である。まず、白・黒2コンパートメント・ボックスとこの装置を収納する防音ボックスを作製して、多くの依存性薬物の報酬効果を測定して精神依存を評価した。この条件づけ場所嗜好性試験による依存性薬物の体験に対する欲求、すなわち精神依存の測定が多くの反響を得て世界中でこのCPP法が使用されるようになった。さらに、医薬品開発における依存性試験にも応用されるようになった。そこで、条件づけ場所嗜好性試験を自動測定する装置（KN-80）も開発され、現在も多くの研究者に使用されている。私は動物が依存性薬物を摂取したいという行動を定量化することに力を注ぎ、その成果を日本精神薬理学会でも報告して多くの意見を頂いてきた。その結果、依存性薬物に対する摂取欲求が定量化できるようになり、その機序解明や依存症の治療薬や予防薬の開発にも取り組むことができた。このように、私の研究生生活は精神薬理学会と共に歩んできた。

日本神経精神薬理学会 50 周年記念誌 第 40 回日本神経精神薬理学会を開催して

曾良 一郎

神戸大学大学院医学研究科 精神医学分野



第 40 回日本神経精神薬理学会 は 2010 年 9 月 15～17 日に第 20 回日本臨床精神神経薬理学会との合同年会として仙台国際センターにて開催されました。約半年後の 2011 年 3 月には東日本大震災が発生しましたが、震災の時期によっては開催に大きな影響がでていたでしょう。私自身は初めてお世話をした全国大会であったことから、本稿を書いていると学会の準備や開催に関わる様々な出来事が感慨深く思い出されます。

この合同年会は、臨床精神神経薬理学会の会長を山形大学医学部精神医学講座教授の大谷浩一先生、神経精神薬理学会は当時、東北大学の精神・神経生物学分野という基礎医学の教室の教授であった私が会長を務めさせていただきました。神経精神薬理学会は生物学的精神医学会との合同年会を重ねてきた時期があったのですが、第 38 回、第 39 回と臨床精神神経薬理学会との合同年会を続け、第 40 回は連続して 3 回目の合同年会となりました。

実は合同年会を仙台国際センターでの開催を決定し準備を進めていたところ、仙台国際センターを管理する仙台市から APEC（アジア太平洋経済協力）首脳会議の関連会合を合同年会と同じ時期の 2010 年 9 月に仙台国際センターを会場として使用できないかとの申し入れがありました。仙台市としては APEC の関連会合を自前の国際会議場で開催したいとの強い思いがあり粘り強く折衝されてきたのですが、年会も基調講演を含むプログラムの概要を既に組終えていたことから、お譲りすることはできませんでした。

年会前日の 9 月 14 日午後には学生や若手研究者を対象に精神薬理学の教科書を一通り学ぶ機会として公開集中講座を 5 時間にわたって開催し、学生や若手研究者のみならず指導的立場の方々も参加され、高い評価をいただきました。同日夕刻からは仙台市近郊の秋保温泉のニュー水戸屋にて会長招宴を催し、基調講演の登壇者や両学会の関係の先生方に温泉を楽しんでいただきました。

この合同年会ではパネリストのフリーディスカッションによって研究領域の課題・問題点を掘り下げていただく「スタディグループ」を初めて企画いたしました。スタディグループには予想を上回る人数が参加され、聴衆の方々からもディスカッションに積極的に参加下さり、通常のシンポジウムとは違った観点から大変に勉強になったと評価をいただきました。

開催前は全国的には必ずしもアクセスが良いとは言えない仙台に来て下さるのかどうか気がかりだったのですが、両学会の皆様のおかげで、幸いにも参加者は約 1,600 名に及び、大過なく学会を終えることができました。最後になりましたが、日本神経精神薬理学会が 50 周年を迎えられ、今後益々、ご発展されることを祈念いたします。

国際神経精神薬理学会議（CINP）への参加

田中 正敏

久留米大学名誉教授、堀川病院



日本神経精神薬理学会が 50 周年を迎えるということで、この学会に理事として参加したり、何回となく発表して来た者として大きな感激に包まれている。思い出を書くということで手をあげたものの、私の感慨は、その親学会と言ってもいい、国際神経精神薬理学会議（Collegium Internationale Neuro-Psycopharmacologicum, CINP）に対するものが大きい。そこで本来の記念誌の意図とははずれるかもしれないが、現在の会員の方々がおそらくあまりご存じないであろう、最初の頃の CINP のいくつかの思い出を紹介したい。

1984 年 6 月 22 日。フィレンツェ郊外の中世の村アルテミノ。私はその小高い丘の上にあるメジチ家の中世の狩猟の館である”ラ・フェルディナンダ”に向かっていた。第 14 回 CINP の晩餐会（バンケット）に出席のためである。各国から集まった精神医学者、薬理学者、生理学者、解剖学者、心理学者などの約 1,000 名余の研究者は、昼間とは打って変わったきちんとした服を装っている。皆、高らかに鳴り響くファンファーレを合図に、赤、白、黄、青、緑などの中世の民族衣装をまとった人々が両側に立って出迎えてくれる階段を登って、夕陽の丘に屹立する白い館の中に次々に吸収されていく。ファンファーレの音は、クロールプロマジンの発見からまだたった 30 年くらいしか経っていない間の精神薬理学のめざましい発展を讃えているかのようであった。

それより 12 年前の 1972 年。私は第 8 回 CINP に出席してコペンハーゲンの薬学部の階段教室で講演を聴いていた。第 1 回の CINP は 1958 年にローマで開催されたが、その後主としてヨーロッパで開催されてきた。開催は 2 年に一回で、初めは厳しいメンバー制が敷かれており、メンバーとメンバーが紹介した 1 名のみしか参加、発表できなかった。この学会に出席するため、久留米大学精神神経医学教室の稲永和豊教授と脳疾患研究所の私は、まだ非常に珍しい日本のメンバーであった東京大学の台弘教授に推薦を依頼した。台先生はジェイコブセン会長に問い合わせをされ、日本はヨーロッパから非常に遠い国なので、2 名推薦してもよいという返事があり、私たちが参加できるようになった。稲永教授と私は少量の L-DOPA が統合失調症に有効であるという発表を行った。会場と同様に懇親会も比較的質素なもので、懇親会の席はくじ引きで決めるというものであった。私の席は嫌酒薬ジスルフィラムの開発者であり会長でもあるジェイコブセン教授の前であった。その他に会長の隣りにはハロペリドールを始めとした一連のブチロフェノン系の抗精神病

薬を開発したポール・ヤンセン、私の隣りは炭酸リチウムを開発したスコーであった。すごい人達の中に突然東洋から来た無名の若輩が座っているという構図であったが、皆その若輩を一人前の研究者として扱ってくれた。同じテーブルの全員で何回も乾杯をしたが、そのなかには日本語の「カンパイ！」という言葉も含まれていた。これは日本にも行ったことがあるというジェイコブセン博士の私への好意によるものであった。またこの学会から帰国した 12 月にスコーからクリスマス・カードが送られて来た。それに書かれていたのはメリー・クリスマスではなく、日本語のカタカナで「ハッピー・リチウム」というものであった。

このように最初の体験が強烈であったので、私はこの学会とともに歩いていこうと決心し、その後発表論文のリスト等の業績を提出し、選考委員会の選考で認めていただいてメンバーになることができた。

その後スウェーデンのイエーテボリ (1980)、エルサレム (1982)、フローレンス (1984)、ミュンヘン(1988)、京都(1990)、ニース (1992)、ワシントン (1994)、メルボルン (1996)、グラスゴー (1998)、ブリュッセル(2000)、パリ (2004)と 1986 年のサン・ファンと 2002 年のモントリオールの 2 回を除き約 20 年余にわたり CINP に出席し発表を行い、その変遷をみることができた。それはほとんどその間の向精神薬の発展の歴史でもあった。枚数の制限上あまり書けないが、CINP では若い研究者であっても論文で名前をみるような学者にフランクに質問でき、それに対して親切に答えてもらえるような雰囲気をもっていた。しかし、最初の頃のアカデミックな雰囲気のある会から非常に商業主義の色彩の濃い会に変わっていった。また基礎色が強かった会から臨床色が強い会に変わった。それでも、基礎医学者の臨床医学についての造詣は深く、同様に臨床の医学者も基礎医学に造詣が深いといった特色はある程度残されていた。

この 20 年余のなかでやはりこの学会が京都で開催されたことは非常に有意義であったし、感動的であった。

また何回もこの学会で一緒になった広島大学の山脇成人教授が CINP の会長を努められたことも誇りであるし非常に感慨深いものがある。

本稿は最初に記したように日本の神経精神薬理学会が 50 周年を迎えるにあたっての言葉としてはあまりふさわしいものではないかもしれない。

しかし、あえてこのように記したのは、精神神経薬理学という分野で日本神経精神薬理学会が今後本当によい意味で基礎医学者と臨床医学者とががっちり組んだ学会となり、精神薬理学や精神医学や神経科学の発展に繋がって行くことを切に願っているからである。

学会との出会い、繋がり、そして自身の成長へ

砥出 勝雄

ニューロサイエンス創薬コンサルティング



学会創立 50 周年に際し、本学会を支えてこられた諸先生方に改めて敬意を表します。

今般、本記念誌へ投稿の機会をいただき大変ありがとうございます。

私と本学会との出会いは本学会の前身である神経薬理研究会の 1981 年でした。製薬会社では中枢神経系の研究領域に携わっており、行動薬理に関する基礎研究と臨床を学べる学会を探しており、本学会が最適と判断した次第でした。当時、本学会では夏に群馬大学の田所先生、栗原先生らが「赤城山合宿」という名で勉強会やマラソンなどを通じ参加者の交友にもご尽力されていた記憶が思い浮かびます。長距離を走るのが得意ではなかったので、この合宿には参加したことがありません（笑）。

当時を思い起こせば、学会参加や発表を通じ論文でお名前を拝見するようなご高名な先生方には恩師の瀬川富朗先生や野村靖幸先生を通じ面識ができ、多くの先生方から叱咤激励を受けたものでした。

学会参加、発表を回顧しますと学会に入会した頃、私自身 dopamine の microdialysis の実験を始めており、スウェーデンから特別講演で来日された教授と話げできたこと、1990 年代まででしょうか、それまで投稿論文は現在のような電子ではなく、air mail で reprint の依頼、返信するのが慣例でした。その中、私の投稿論文に関し、ワシントン大学の教授から毎回 reprint の依頼を頂戴しており、第 22 回の本学会に特別講演で来日された際、初めてお会い出来「砥出です、やっと会えましたね」と会話を交わしたこと、さらに私の自社化合物の発表を聴講されておられた企業の研究者同士が「発表内容に関し先を越されたね」と言っていたよと、その隣に座っておられた知り合いの先生からお聞きしたとき、熱い競争心が沸いたことなど、枚挙にいとまがないほどの思い出が浮かびます。

私が本学会に参加し始めた頃、製薬会社からの発表も多く、口頭発表やポスターセッションでの質疑応答などの機会も多く持て、企業の研究者の方々とも親しくなり今も交友させていただいている方もおります。企業からの参加者の方々には是非、企業間の交流機会を育む場として本学会を活用されることも望みます。また、昨今、企業から創薬研究の発表がないなどと言われております。毎回の参加あるいは特許等で発表には制限があると思いますが、可能な範囲で学会参加、発表の機会を持たれることを切に望んでおります。

私自身、本学会にて多くの産官学の研究者の方々との出会いを通じ、この学会で育てられたといっても過言ではありません。本学会では評議員、総務委員として携われたこと、昨年功労会員として認証を受けました事、重ね重ねこの場を通じ御礼申し上げたいと存じます。もちろん、これからも学会参加を通じ新しい知見を得れることのみならず、参加される方々と交友できることを楽しみにしたいと思います。

今日まで脳疾患の治療薬として日本からも多数開発され、**blockbuster**に成長した薬剤もあります。今後もこの領域の治療・予防に関する基礎・臨床研究を基盤に革新的な創薬へ繋がる、世界に発信出来る研究を育む国際的な学会として、本学会がますます発展しますことを心から祈念しております。

JSNP50 周年記念誌に寄せて 精神科の臨床研究について

中込 和幸

国立精神・神経医療研究センター



日本神経精神薬理学会 50 周年、まことにめでとうございます。

また、COVID-19 の感染拡大によって、犠牲になられた方に心よりご冥福をお祈りいたします。一方、今年の年会は、ICT を活用した画期的なものとなりました。おそらくこうした逆境がなければ、なかなか取り組もうとはしなかつたろう新たな試みであり、その効果を楽しみにしているところでもあります。

2018 年より理事長を務めさせていただいている中込でございます。今回、「50 周年記念誌」編集担当の廣中直行先生から寄稿を依頼されて、改めて本学会の理事長挨拶を見直して、私が本学会の様々なミッションの中で、精神科の臨床研究の活性化を重視する気持ちが一貫していることを認識いたしました。

言うまでもなく、このように思う気持ちの出处は、精神科領域における新薬開発の停滞であります。その危機感を最も強く感じ、警鐘を鳴らしておられたのが山脇元理事長であり、自ら産官学連携活動である PPP タスクフォースを立ち上げられたのでした。その末端に加えていただいた私は、企業の開発担当者が抱えている懊悩を見るにつけ、①わが国における研究基盤の貧弱さ、②新たなメカニズムに基づく新薬開発におけるコンセプトと薬事承認要件で外すことのできない臨床診断との大きなずれが、開発を進める上で足かせになっていることを感じました。

②から少し説明を加えさせていただきます。基礎研究のことは門外漢なので、的外れであればお許しください。新薬開発につながるシーズを探索、開発する場合、特定疾患の病態仮説に基づいて行われるものと思われまふ。しかし、疾患そのものが生物学的異種性を含むものであることから、様々な病態仮説が提唱されており、いずれもその疾患全体を説明し得るものではありませんし、その他の疾患の患者の一部の病態を反映している場合もあります。いずれにしても、ある種の病態仮説に基づいて、その改善に寄与すると思われる物質を特定し、安全性・薬物動態試験で検証を行うとともに、基礎実験、POM 試験を通じてそのコンセプトを確認します。ここからが問題です。そもそも病態仮説は、それが正しいとしても、特定疾患の一部を説明できるものでしかありません。それでは、どのような適応症を目指せばいいのでしょうか。その病態をもつ患者は必ずしもその疾患に限られているものではありません。私が研究者なら、そのコンセプトに合った患者集団を対象とした試験をしたいと思うでしょう。少なくともその特定疾患の患者のうち、病態仮説で説明できる者を抽出して、行うのが妥当でしょう。また、臨床評価尺度も新たなコンセプ

トに合ったものを開発する必要もありますし、何より患者の社会生活機能や満足感の回復につながる臨床評価尺度が必要です。しかし、実際の治験はそうはいきません。これまでと同じように、臨床診断に縛られて、同様の評価尺度を用いて開発を進める限り、me too drug しか生まれて来ず、従来薬で十分な効果を受けない患者は、当然 me too drug ではよくなり、治療抵抗性のレッテルを張られて、苦しみを抱えながら生きていくこととなります。

このように、患者個人がもつ病態に合わせた治療を行えるようにするには、臨床診断を超えて、神経回路、臨床徴候、分子情報等を組み合わせた新たな層別化が必要と思われます。それを可能にするためには、縦断的経過を含めた大規模なレジストリデータを構築することが一つの解決法と思われます。がん、糖尿病、神経難病など、他領域では一早く、レジストリの構築に取り組んでおります。遅ればせながら精神疾患に関しても、精神神経学会と国立精神・神経医療研究センターが連携して、当事者を含む諸団体の協力も得て、レジストリ登録が始まろうとしています。

本学会でぜひ取り組んでいただきたい課題があります。それは、治験、臨床試験データの集約と利活用です。治験で得られたデータは、GCP 基準の下で信頼性が担保されたものであり、臨床試験も近年、とくに臨床研究法案が設立されてから、その質は以前より改良されていますので、合わせて解析することも可能ではないでしょうか。とくに、治験に関しては、承認に至らなかった試験も合わせて、大規模データを形成し、一つの試験では得られない信頼性の高い知見を発出し、また、次の治験デザインのブラッシュアップにつなげていただきたいと思います。

患者レジストリ、臨床試験データベースはいずれも貴重な研究基盤です。多くのアカデミアや企業の研究者に広く公開され、アクセスしやすくする必要があります。短期間に成果を求められる忙しい研究者がこうした事業にエフォートを割くことは、たやすいことではありません。しかし、誰かがやらなければならないことです。

日本神経精神薬理学会 (JSNP) と共に歩いて 47 年：
若者へのメッセージ

鍋島 俊隆

藤田医科大学・NPO 医薬品適正使用推進機構



50 周年のお祝いを申し上げます。精神疾患の薬物療法の夜明けとともに、JSNP は精神薬理談話会として 71 年に産声を上げ、向精神薬の開発・薬物療法の発展の歴史とともに成長してきた。神経精神薬理学を確立するには心理学、精神医学、薬理学全ての研鑽、基礎と臨床の連携、各領域の専門性に敬意を払った自由な討論が必要である。そのため、JSNP 設立時に理事は基礎と臨床同数、理事長、年会長、各委員長は基礎と臨床の持回りと決めた。この基本的原則を忘れないで欲しい。この書面をお借りして、小生に「基本の基」をお教え、お導き下さった諸先生、また、これまで小生と我慢強くお付き合いくださった基礎・臨床の先生方、弟子たちに深謝いたします。

73 年、恩師亀山勉先生の研究室に就職し、第 3 回年会から参加している。第 8 回までは清和病院のエアコンのない蒸し暑い講堂で開催された。40 名程の少人数であったが、「薬物で精神疾患を治療するという新領域の研究」ということで心理学、精神医学、薬理学、製薬企業などの専門家が熱い討論を重ねていた。各分野の発表は他分野の研究者には未知の知見であり新鮮であったが、薬物が行動をどう変容するかに重点が置かれていた。

大阪大学大学院で生化学を専攻した小生は、薬物がどのような脳内物質に作用して行動を変容しているかの観点が欠けていると感じた。そこで行動変容について生化学的観点から心理学、薬理学を統合した基礎研究を進めることにした。心理学の本を乱読し、亀山先生の後輩・重久剛先生（心理学者）からオープンフィールド（OF）法、オペラント

（OP）行動解析法を習い、ラット、マウスの OF、OP 行動やモルヒネによる行動変容に関わる脳内セロトニン(5-HT)の役割について鈴木正彦、鶴飼良と研究を始めた。

精神薬理学の進歩は薬物の脳内物質に対する特異的な作用、脳内物質の微量分析法によることが大きい。当時は 5-HT の測定は蛍光によっており、安定性が悪く苦労した。現在、無拘束で経時的に複数の神経伝達物質を同時に液クロで測定できるのは隔世の感がある。現在は押しも押されもせぬ斯学の権威である山脇成人、祖父江元、中原大一郎、尾崎紀夫先生らは当時はまだ院生だった。早くから液クロを導入していたお蔭で、彼らを指導する機会を得え、その縁で小生の弟子の世代まで共同研究などでお付き合いいただいている。臨床医として物質を基盤に精神活動を理解することの重要性を示し、また基礎との連携を深めて沢山業績を上げて下さっており、大変感謝している。

若手の育成のため田所作太郎先生のお世話で、75-89 年に赤城青年の家で 2 泊 3 日の合宿が行われた。午前：研修、午後：アスレチック、マラソン等、夕：研修で、研修では上

記各専門分野の最新知見、方法論など学んだ。リクレーションでは各分野の若者をワンチームとするグループ分けをした。縦割りの研究体制を崩した合宿は収穫が大きく、異分野の若者同士が連絡を取りあい、切磋琢磨して研究を進め、現在の JSNP の基盤を作ったといっても過言でない。合宿で仲間となった方々とは現在まで交流が続いている。この合宿は 89 年に終了となったので、是非継続したいと思っていたが、90 年名年古屋大学赴任後、薬剤部長職が併任となり、多忙で、恩返しができなかったことを今も悔やんでいる。

85-05 年に ACNP と合同会議をハワイで 4 年毎にした。01 年を除いて毎回参加した。この会は Japanese English にも程遠い「鍋島語」でも参加が OK だったお蔭で英語に抵抗がなくなった。研究を進めるに当たって、若者は自分の頭で考えて、まず行動をして、結果を出し、自信をつけることで未来に繋げることができる。この会も午前：学会、午後は自由行動であり、亀山先生から厳禁だったゴルフが、佐藤光源、笹征史両先生のお誘いのお蔭で、ハワイでのみ許された。下手なゴルフは教授就任後に国内でも許され、退職後の趣味となり、喜寿となったが心身とも健常である。両先生は小生の名永年主治医である。

ACNP が縁で CCNP との合同会議が 95 と 01 年に行われシンポジウムを担当した。バンクーバーでの Fibiger、柳田知司先生とのカラオケ、バンフでの Qurion, Phillips 先生とのバイソンのステーキなど思い出深い。これが縁で、マギル大学と日加共同研究を行い、堀孝文、新田淳美、北市清一、中川西修君を Qurion 研へ送った。日仏共同研究はモンペリエ大学と日韓共同研究は江原大学と行い弟子の T.Maurice へ、丹羽美苗、毛利彰宏、共同研究者 HC. Kim 先生へ中島晶、衣斐大祐を送り、相手側の院生を受け入れた。

78 年、モルヒネ・ペントバルビツール依存研究のためミシシッピ大学 Ho 研究室に留学した。その頃、フェンシクリジン(PCP)の乱用が問題になっており、時間外にライフワークの一つとなった PCP 研究を始めた。陽性・陰性症状・認知障害様行動を示す PCP による統合失調症モデル動物を作成でき(野田幸裕、北市、間宮隆吉ら)、いくつかの市販されている抗精神病薬の評価に使われた。これが縁で Carlsson 先生がグルタミン酸

(Glu) 仮説を発表され、小生を my son とお呼びになり、06 年三学会合同会議、07 年退職パーティにも来訪して下さった。80 年代は覚せい剤精神病モデルが主流であり、尊敬する精神科大家に「PCP など使って何が分かるの?」と言われたのが夢のようである。このケースでは PCP が臨床でどのような症状を起こしているのか、統合失調症患者の症状をどう変えるのかなどの face validity から Glu 仮説に繋がった。基礎と臨床のクロストークが如何に大切か分かる。

遺伝子改変動物は精神活動に関与する分子の同定に汎用されている。1990 年代には生体内にある分子を欠損すれば精神機能が損傷されるというのが常識であった。しかし、ノシセプチン受容体欠損マウス(竹島浩先生作成)では、逆に認知機能が正常動物よりも良かった。従来の常識を覆す発見であったが、Editor の評価のお蔭で、Nature に掲載された(野田、間宮ら 1998)。若者は常識と思われていることが本当かという疑問を常に持つこと、自信の持てる実験技術を習得して、信頼できるデータを出し、自分の出したデータが

従来の仮説と違っていれば、新たな仮説を提示することを目指して欲しい。

90年、NMDA受容体関連のCINP（京都）サテライトシンポジウムを名古屋で開催した。Cho、Domino、Qurion、Su、Zukin夫妻、大森哲郎、鬼頭、西川徹、野村靖幸、諸地、米田幸雄先生らが参加された。NMDA、PCP、シグマ受容体関連では、ラボ出身の奥山茂、吉田茂、小川伸一（大正製薬NE-100）と松野聖（参天製薬SA4503）がシグマリガンドの開発に携わり、ラボでは山口和正、平松正行、山田清文、石川和宏、Maurice、宮本嘉明、毛利らが基礎研究に参画した。**継続は力なり**、PCP関連研究は今も続いている。

Ho研へは伊藤芳久、稲田俊也、鈴木利人、徳山尚吾、成田年君らの留学の世話をした。彼らはJSNPの主要メンバーとなり活躍されており慶んでいる。

00-04年目標達成型脳科学研究「依存性薬物による精神障害の機構の解明」を行い、多くの基礎・臨床研究者（植田弘師、佐藤公道、鈴木勉、中川貴之、長瀬博、那波宏之、新田、三木直正、山田、伊藤千裕、尾崎、伊豫雅臣先生）が参画した。**抑制薬モルヒネ、興奮薬メタンフェタミンは薬理的には全く作用が反対であるがどちらも依存を惹起する。**そこで2つの薬物に共通して変化する遺伝子を検索した(山田ら)。神経伝達物質に関連する多くの分子と中枢作用がないと考えられていた幾つかの分子が見つかった。常識的ターゲットに焦点を絞るとビッグラボとの競争に負ける。ゆっくりと確実なデータを上げるために、常識外の中枢作用のない分子についてターゲットを絞った。TNF α （中島晶、斎藤邦明ら）が依存を抑制、プラスミノージェンアクチベーター(永井拓ら)、マトリックスメタロプロテアーゼ(溝口博之ら)などが、逆に促進することを明らかとした。新規依存関連物質(シャチ、ピッコロ等)を発見したことも思い出深い(丹羽、新田ら)。シャチはNAT8L構造解析に繋がった。

OP行動を利用した聴覚（高橋和幸ら）、視覚（松野・加藤晃ら）機能試験法、潜在学習（市原賢二ら）や物体認知機能（T. Alkamら）を利用した注意機能試験法、十字迷路を利用した認知機能試験法（伊藤治朗ら）を開発した。また、臨床データに基づいて、アミロイド β を脳室内へ持続投与したアルツハイマー病（新田ら）、CO暴露健忘（平松、Maurice、TY. Pingら）動物モデルや母体にニコチンを摂取させ、出生後の仔のAD/H Dモデル動物（Alkam, 鳥海和也、間宮ら）などを作成した。これら動物モデル、試験法も創薬に利用されている。

91年に臨床神経精神薬理学会が分離してから、学会当初の基礎と臨床のシームレスな連携が途絶えていた。01年に第31回JSNP年會を担当した。両学会の連携を再開するために山脇先生にお願いして広島で合同年會を開催した。盛況となり、続けて合同年會を画策したが失敗した。願っていた合同年會が第34回からは他学会と実現しており喜んでいる。今後も「**基礎研究者は臨床に学び、臨床研究者は基礎から学ぶ**」という初心を忘れず**基礎・臨床の強力な連携**をして欲しい。

手前味噌な内容となったが、名古屋大学定年頃まで研究に関わった方々（敬称略）を網羅した。漏れた方々は正常老化が進んだ老翁の記憶と字数制限の結果とお許しください。

振り返れば、本学会の参加が今の自分の起源だった

成田 年

星薬科大学 薬理学研究室 /

国立がん研究センター研究所 がん患者病態生理研究分野



ありきたりだが、人にはターニングポイントがある。私のように紆余曲折を繰り返し、現在のような場所にたどり着いた者には、小さなターニングポイントが多いものだが、研究を続けて行きたい、行かなければ次に降り立つところが見えないと感じ、能動的に自分の進むべき道、今に繋がる道を、半ば自身に言い聞かせるように選んだのは、本学会に参加したあの時がきっかけだったのかもしれないと、なんとなく今にして思うのである。少し都合が良すぎるかもしれないが、自分自身の気性を冷静に分析すれば、いくつかの重要なターニングポイントの一つは、きっとあの時だったに違いない。

私は、本学会の創立者のお一人である故柳浦才三先生、そして本学会の発展に大きく寄与されて来た鈴木勉先生の門下生として、1989年よりこれまで30年余りに渡り、本学会に育てて頂いた。私自身の人生最初の学術大会での発表は、まさに本学会の年会だった。その発表の直前に、故田所作太郎先生らと昼食をご一緒させていただいたが、不覚(?)にも、その時、手の震えが治らなかったことをはっきりと今でも覚えている。ほとんど、何も食べられなかった。何が不安で、何に緊張感が高まったのかは、定かではない。あまり自分らしくない、初々しい過去ではあるけれど、その初陣のポスター発表後に感じた、何とも言えない不思議な感覚、やるだけやったけれど、ほとんど達成感が得られなかったあの感覚が、その後の自身の発奮材料になったのだろうと今は思っている。私のポスターの前を、通り過ぎていかれた先生方や、折角立ち止まっていたのに、あまり魅力的ではなかった内容や稚拙なプレゼンによって先生方に何も響かなかったことなどが自身で感じ取れたのだろうと思うが、その言いようのない敗北感や違和感が忘れられない。あの日、あの時、自分の生きている世界の小ささを身に染みて感じ、将来の目標などという大きなテーマでこそないが、自身の近未来、次の目標がはっきりと定まったのではないかと

思う。今思い起こしても、鮮明に思い出す、とりわけ貴重な体験だった。

また、本会を通して、運命的な出会いがいくつもあったことが、今の自分を支えている。雑草からの脱却という自分道は、様々な受動的な要素が引き金になっていた感もあり、こうした精神的な闘争心を掻き立てる土壌を、本学会は持っていた。あの時の私だけが、強く、このように感じていたのかもしれないが、とにかく、自身にとって刺激の場であった。

私の原点は、行動薬理学である。まさに、動物の“精神行動”を色々な行動パラメーターから推し量り、脳機能を想像していくアプローチである。しかし、そこには常に自問があった。動物モデルとヒト疾患の隔たりに対する理解の欠落、稚拙な病態像の知識、簡素すぎる技術、行き過ぎた考察など、常に反省しかなかった。おそらく、本当の基礎生物学、基礎医学の知識が欠落していたのだろう。動物の行動変化を既存の尺度でしか読み取っていなかった。そうした自己葛藤から脱せず、疑問や質問だらけの頭になり、しばしば先輩の先生方にも随分失礼な質問を投げかけ、困らせていた。

大学院博士課程に進学するときに、当時札幌医科大学の精神科の講師をされていた、斎藤利和先生の研究グループへ、“内地留学”した。医局での刺激、また生化学的な手法の習得など、全てが楽しかった。斎藤先生とドライブしながら小樽の病院への出張に同行した時のエピソードなど、鮮明に記憶に残っている。長崎大学精神科の小澤寛樹先生をはじめ、本会に関わる多くの精神科の先生方との接点を持てるようになったのも、この札幌出向がきっかけであったことは間違いない。

一方、星薬科大学構内で、長期に渡り行われていた本会主催の“抄読会”も、刺激的であった。文献などを紹介したり、研究発表をしたりする小さな会であったが、その会には多くの重鎮の先生方が参加されていた。未熟な私は、多様なバックグラウンドを持たれている先生方がヘテロに集まるこの会に、不思議な空気を感じていた。とりわけ、心理学の先生方の生物学的解釈が、私には斬新に写った。実験動物中央研究所の柳田知司先生門下の先生方である廣中直行先生、高田孝二先生をはじめ、多彩な先生方にお会いできたのも、本会、本学会があつてこそのものであった。

私は、1993年、学位取得後に米国に渡り、6年ほど彼の地にて修行をしていた。こうした留学のきっかけを与えてくださったのは、名古屋大学名誉教授である鍋島俊隆先生である。それ以来、先生には、常にお声がけをいただき、ピンチの時に救っていただいた。家内共々、本当にお世話になっており、もちろん、今でも全く頭が上がらない先生のお一人であられる。

こうして、本会を通してお世話になった先生方、運命的に出会った先生方は、数えきれない。そして、今の本会の躍進を考えると、大きな展開期を迎えていた数年前から始まった池田和隆先生、山脇成人先生、中込和幸先生をはじめとする執行部の先生方の本会への意識注入には凄みがあったし、また次世代を意識した強い信念は特筆すべきことであると感じる。私自身は、韓国、ソウルでの大会の成功が、その後の本会の発展や、その在り方を象徴していたように思える。進歩とは、やはり人が牽引するものであると今更ながらに思う。

私も、今やそれなりの年齢となり、幸いにも2つの研究室を運営する立場となったが、精神神経薬理学領域の研究に最初に触れられたことが、その後の研究の発想の源となっていることは間違いない。飛躍的な技術の進歩を遂げる神経科学領域のノウハウを活かしながら、臨床現場にフィードバックできる研究、そして世界に伍する研究を推進することを目標に掲げ、これからも本学会に支えられながら、歩んで行こうと思うこの頃である。また、恩返しのためにも、次代を担う若手の育成に力を注ぎ、本学会ならびに本領域の発展に、微力ながら努めたい。

50周年、誠におめでとうございます！

赤城山合宿の思い出

野村 総一郎

一般社団法人日本うつ病センター



この度は日本神経精神薬理学会 50 周年、誠におめでとうございます。私は本学会がまだ「精神薬理懇話会」と称して活動を始めて 2-3 年しか経っていなかった頃からの会員ですから、かなりの古参になるかと思えます。もともと私は純粋な精神科の臨床医なのですが、向精神薬の作用メカニズムにも興味があり、基礎と臨床の両方を学べる場を探していました。精神薬理懇話会はまさにその目的に適っていたわけです。

学会での思い出は、もちろん沢山あります。しかし、学問的な業績の話をしてもキリが無いでしょうし、学会の初期のエピソードとしていつも思い出す「赤城山合宿」のことと、そこでの出会いについて思いつくまま述べてみます。

通常の学会と言えば、まあ集団で行われる発表会のようなものでしょう。しかし本学会の初期には、それとは大きく異なる「赤城山合宿」というのが行われていました。これは、精神薬理を研究する若手研究者を群馬の山の中にある「国立青年の家」という合宿所に集めて、1 週間弱の泊まり込みで討議をする、という形式でした。ベテラン研究者の講演やスーパーバイズもあるのですが、若手にとってはかなり厳しい環境であった、という印象は否めません。ただ、ひたすら勉強だけしているのではなく、サイクリングやミニマラソン、竹馬大会など、レジャーみたいな催し物もあり、楽しい雰囲気、若手同士の交流が出来る魅力もありました。

「親しくなる」と言えば、いつも思い出すのは、本学会の前理事長の山脇成人先生とこの合宿で知り合ったことです。山脇先生と私は同じ広島出身であるものの、知り合ったのはその事とは直接の関係はありません。そうですね。まだ二人とも 30 代前半だったと思いますが、そこでたまたま同室になったというのがきっかけです。私が 2 年位早く参加していたこともあり、先輩面をして、部屋の掃除の仕方とか、毛布のたたみ方を厳しく？教えたのですが、その時は世界の精神薬理学をリードする、ここまでの人物とは正直言って思いませんでした。すごく神経の細やかな、気配りの人だな、という印象はありましたが・・・

まあ、そのような出会いにかぎらず、多くの出会いがあり、私などは、この合宿への参加により精神薬理学の勉強を止められなくなった、とも言えないことはありません。私はこの合宿がいつ頃まで行われていたのかは、寡聞にして知らないのですが、まさかこういう企画を現代によみがえらせることは不可能にしても、会の雰囲気だけでも、伝統的に残せれば素晴らしいと思う次第です。

日本神経精神薬理学会 50 周年に寄せて

「脳神経内科と精神医学の融合」

服部信孝

順天堂大学医学部脳神経内科



日本神経精神薬理学会 50 周年おめでとうございます。ご存知のよう日本の神経学の発展は精神医学と共に歩んでおります。

1902 年に東京大学内科学第一講座教授の三浦謹之介先生と同精神医学講座教授の呉秀三先生により設立されており、1935 年に日本精神神経学会に改称されて、精神医学の診療科の中には、精神科以外に精神神経科や神経科を標榜するものもあり、大学の神経学の教育も内科学講座と精神（神経）医学講座で担当されるようになりました。1948 年に創設された日本脳神経外科学会が大きな発展をしていたこともあり、1953 年に開催された第 50 回日本精神神経学会年次総会で、精神医学部門と神経学部門に別れた経緯があります。1959 年に第 5 回内科神経同好会において神経学独自の学会設立が決定され 1960 年現在の神経学会が誕生した歴史があります。私共の順天堂大学は、初代教授は榎博太郎先生で東大精神科出身ですが、パーキンソン病の定位脳手術で世界的な業績を残された有名な先生で御座いました。二代目教授はアメリカで臨床神経学のトレーニングを受けた留学経験のある水野美邦先生で生粋の神経学者で御座いました。両偉大なる精神医学と神経学出身の教授お二人の融合で現在の私共の神経学教室が出来ていると言っても過言ではありません。この歴史を振り返ると今こそ神経学と精神医学の融合の必要性を感じております。神経内科疾患も精神医学疾患も神経回路の破綻により起こるものであり、双極性障害もパーキンソン病もミトコンドリア異常が存在します。神経変性疾患に“うつ症状”を認めることは少なくありません。そして一部の患者において精神疾患が神経変性の初期に出現することが指摘されています。パーキンソン病では、うつが prodromal な症状として捉えることが大事であり、レム睡眠行動異常症はパーキンソン病の発症前リスク群であることが証明されております。若年性パーキンソン病では自閉症や統合失調症の合併症例もありますし、治療に関してもパーキンソン病では抗うつ薬を必要としている患者も少なくありません。薬物だけでなく脳深部刺激療法も有効であり、重要な治療オプションとして臨床応用されております。精神医学領域でもうつ病や強迫神経症など脳深部刺激療法の有効性が海外では報告されております。是非ともこの 50 周年を良い機会に神経学と精神医学の融合を目指した研究を推進したいと思っております。

本学会で活動した時代を振り返って

樋口 輝彦

国立精神・神経医療研究センター 名誉理事長

日本神経精神薬理学会が創立 50 周年を迎え、記念誌が編纂されることになり、これに寄稿する機会が与えられたことは大変大きな喜びである。



本学会の沿革は本記念誌の中で詳しくまとめられると思うので、そちらに譲るが、ここでは小生が本学会で活動した時代（1980～2016 年）が神経精神薬理学の歴史の中でどのような位置を占めていたのかについて若干振り返ってみたい。

「精神薬理学」が薬理学の一専門分野として認知されたのはジャン・ドレーがクロルプロマジン(CPZ)を精神科治療薬として応用できることを報告した 1952 年に始まる（1949 年のジョン・ケイドによりリチウムの抗躁作用の発見という説もあるが）。わが国では CPZ は 1955 年頃から学会で症例報告が行われていたが、多数例を対象にした臨床報告は 1956 年の江副・石井の論文に始まる。しかし全国規模の日本精神神経学会での報告は諏訪・佐野による 1957 年の報告を待つことになる。本学会の前身である精神薬理懇話会が創設されたのは 1971 年である。1985 年には懇話会は改組され日本神経精神薬理学会が誕生した。その 5 年後には京都で国際神経精神薬理学会が開催されたことは印象に強く残っている。1990 年からの 10 年は精神薬理学が発展した時期であり、国際的には欧米中心に研究が進展した時期である。すでに新規向精神薬の開発ではプラセボ対照の RCT が常識になっていた。2000 年以後、小生は新規薬剤の開発、臨床試験に関与する機会が増えることとなったが、当時、わが国への新規薬剤の導入には海外とのドラッグ・ラグが問題となっていた。その原因の一つが、プラセボ対照の RCT が日本ではできないことにあった。世界は同時開発の時代に突入していたのである。日本だけが世界から取り残されることがあってはならないとの思いから、学会会員の中で意を同じくする人たちとともに、学会内外で機会を得てプラセボ対照試験の必要性をアピールした。その効果がどれだけあったかはわからないが、21 世紀に入ってわが国においてもプラセボ対照比較試験が徐々に行われるようになった。このような時代の中で小生は本学会において活動させていただいたことを改めて感謝申し上げたい。

さて、21 世紀に入ってインパクトのある変化が起こってきた。それまで国際神経精神薬理の中心（これは学問的な中心という意味ではなく、市場も含め、また開発の場も含めての話である）が欧米であったものがアジアに移ってきたことがひとつである。世界のメガファーマのいくつかが向精神薬の開発から撤退したことが 2 つ目である。向精神薬の開発が極めて難しいことが改めて認識され、企業としては投資した開発が陽の目をみなければ、その

事業から撤退するのは当然なのかも知れない。しかし、ここで撤退されると精神科治療学は停滞し、これを取り戻すためには計り知れない時間と努力が必要になることは明白である。ここ数年、これまでになかった学会と製薬企業、官の密な連携が行われるようになったことは、このような危機を克服する上で極めて重要であると考えられる。

このような精神薬理の歴史の中で極めて困難な状況にある現在、我々はもう一度原点に戻って本学会の在り方を考えてみる必要がある。そこで、小生は1961年に発行されたJ.ドレとP.ドニケル著の「臨床精神薬理学」を紐解いてみた。この本は精神薬理学のバイブルとも呼ばれる歴史的書物であるが、その日本語版への序文で著者は次のように述べている。その中の一文を次に引用してみたい。

『精神薬理学は今まで専門を異にする研究者の間で積極的な協力が最もよく行われ、また将来も有望な領域であるように見える。精神医学はこれまで医学の中で最も孤立しているものであったが、今日では薬理学・生化学・神経生理学の研究者が、その専門領域との関連において、精神医学の徴候学や病因学を学ぶことに努めるようになった。』ここで指摘されている専門領域間の真の連携こそ、今日その実現の重要性が認識されているが、そのことがすでにこの時代に指摘されていることを心すべきであろう。また、この本の日本語訳は秋元波留夫・栗原雅直によって行われたが、訳者のあとがきの中で秋元は今日われわれが認識し、実践すべき次のような提言を記述している。

「向精神薬の果たす役わりはもとより精神医学の領域に限られるものではない。広く臨床医学全般にわたって関連があるが、特に心身相関の見地を問題とする領域では向精神薬のもつ意義は大きい。また、向精神薬と基礎医学との関係も注目しなければならない。薬理学のなかに精神薬理学という新しい領域を発展させ、生理学、病理学や生化学にも新しい研究課題を賦与した。さらにまた、心理学や行動科学のような隣接科学も向精神薬と無関係ではない」

先人たちは精神薬理学の曙の時代にすでにこの学の行く末を予見し、この学の発展には総合科学として関連領域と広く連携、協同することが必要であることを見据えていたのである。これからの50年、100年本学会をどのように発展させるかを考える上でこの先人たちの指摘したことをしっかり頭に刻み込むことが大事であると思う。

薬物・精神・行動の会から日本神経精神薬理学会までの道

宮田 久嗣

東京慈恵会医科大学 精神医学講座



私が精神科医になったのが昭和 58 年（1983 年）で 37 年前であるが、ちょうど、精神薬理学の創成期であった気がする。うつ病のモノアミン仮説が提唱され、精神薬理に関する海外の著書が次々に翻訳され、何か、精神疾患も解明されるのではないかと

いう高揚感があった。当時の精神薬理学は、精神医学、薬理学、心理学の研究者が中心であった。臨床研究では、血液や尿など患者さんの末梢の検体から、中枢の変化をどのくらい推察できるかという議論が活発であったし、基礎研究では、精神疾患の動物モデルを作成する行動薬理学が中心であった。今から考えると、単純な議論ではあるが熱気に満ちていた。

私自身は、医師になったその年から本学会で発表させていただいた。まだ、研究会の時代であったが、東京医大の薬理学教室の渋谷 健会長のもと、新宿のホテル・ハイアットリージェンシーで年会が開催され、ヨーロッパスタイルのドアマンに迎えられ、学会というものはこのような華やかなものなのかと感激した記憶がある（その後、必ずしもそうではないことがわかったが）。最近では、研究分野も細分化され、EBM や利益相反の概念、医師主導型研究などの中で研究を取り巻く状況は変わってきているが、創成期の精神薬理研究の方向性は、精神疾患の治療薬の開発動向に影響される傾向があった。認知症治療薬の開発の時代、抗うつ薬（SSRI、SNRI など）開発の時代、第二世代抗精神病薬開発の時代などである。その中で、精神薬理学にとって大きなショックとなったのは認知症治療薬の認可取り消しであった。認知症という相手が悪かったこともあるが、改めて、サイエンスの厳しき、エビデンス抽出の重要性をつきつけられた思いであった。

当時、私は当学会の事務局があった実験動物中央研究所附属前臨床医学研究所に所属していた。本学会の発起人の一人である柳田知司先生が所長を務める研究所に押しかけていて 8 年近くお世話になった。実験が終わると、図書室にこもって本学会の創設時の精神薬理談話会のガリ版印刷（今や、死語もよいところであるが）の年会抄録を読むのが息抜きであった。その頃の本学会の機関誌が「薬物・精神・行動」という学術誌であった。その後、機関誌は日本神経精神薬理学雑誌から *Neuropsychopharmacology Reports* に変わっているが、私自身は「薬物・精神・行動」という名称が一番好きである。人のこころである“精神”、その表現型である“行動”、こころに作用し治療の武器となる“薬物”の三つのキーワードが本学会の志や精神薬理学の本質をとらえている気がする。そのような思いもあって、2019 年に本学会の会長をさせていただいたときに、年会のテーマを“薬物・精神・行動を紡ぐもの”とした。本学会の創設時の想いを次の時代に紡いでいけたらというささやかなメッセージであった。以下に、第 6 回アジア神経精神薬理学会(AsCNP2019)（池田和隆会長、東京

都医学総合研究所) と第 29 回日本臨床精神神経薬理学会(JSCNP2019 : 吉村玲児会長・産業医科大学)との合同開催となった第 49 回日本神経精神薬理学会年会の運営メンバーの写真(フェアウェル・パーティーのとき)を掲載しておく。ちょうどこの年会開催時に、超大型台風 19 号が本州を直撃するなかで 2,200 を超える国内外の参加者を迎えることができ、本当に感謝に堪えなかった、日本を含めたアジアの神経科学の盛隆を改めて実感することができた。

これからの精神薬理学はどのようになっていくのであろうか。20 世紀は疾患を治す時代、21 世紀は疾患を防ぐ時代といわれつつ、今回の COVID-19 のように人類は依然として疾病に翻弄されている。それでも、一步一步、脳というブラック・ボックスを相手にしながらも、疾病から健全な精神機能に研究の対象はシフトしていくものと信じている。次の 100 周年記念事業にかかわる研究者にバトンタッチをする気持ちで本寄稿の筆を置きたい。

第 49 回の日本神経精神薬理学会

(第 6 回アジア神経精神薬理学会、第 29 回日本臨床精神神経薬理学会との合同開催)



左から新開隆弘 JSCNP 事務局長、小高文聰 JSNP 事務局長、池田和隆 AsCNP 会長、吉村玲児 JSCNP 会長、宮田久嗣 JSNP 会長、笠井慎也 AsCNP 事務局長

いまだに消えることのない記憶は----？

山本 経之

長崎国際大学 特任／名誉教授



日本神経精神薬理学会創立 50 周年記念 — 私も随分歳を重ねたものだと感慨深い。植木昭和先生の九大・薬・薬品作用学教室に大学院生として入学した時から私は行動薬理学を学び、第 10 回精神薬理談話会(1980 年)に初めて発表、その後正式に発足した日本神経精神薬理学会 (JSNP) では 1985 年の第 15 回(京都)で発表した。当時の薬理学分野は、ACh を中心とする末梢神経系薬理が全盛で、動物の行動から薬物の薬理作用を解明しようとする新しい行動薬理学分野はまだまだ「何それ？」感が漂っていた。Dr. Hall に始まる情動性を測定する為の open-field 装置を用いた中枢神経系薬物の前臨床



評価法に関する私の発表は、「バケツの底で何が分かるか？」と揶揄され、落ち込んだりもした。「そもそも人間の心の病気を動物で作り出すことが可能か？」という疑問に自らも苛まれていた。1984 年に刊行された「うつ病の動物モデル」(海鳴社)には、うつ病の診断は患者の内省と行動変化から推察するが、動物モデルでは内省はできないが行動変化を追究することが可能だと述べられていた。さらに漫画(イラスト; 南里由美子)を多用した当時とすれば新鮮でユニークな専門書で、うつ病の本態を示唆する学習性無力モデルをはじめとする様々な動物モデルが紹介され、妥当性のある動物モデルを臨床へ外挿することの重要性が指摘されていた。目からうろこのこの書籍の著者は 野村総一郎先生で、その後本学会でお会いする度に私が抱く“行動薬理的身の上相談”の回答者になって頂いた。私のスライドには漫画を用いているが、この書籍の影響である。

CINP も、1988 年ミュンヘンで開催された第 16 回から発表し、その後 ACNP や AsCNP でも発表の機会を得た。最初の頃は、学会会場のアカデミックな雰囲気に飲まれ、好むと好まざるとにかかわらず会場にくぎ付けにされ、頭上を飛び交う早口の英語にはしばしば不覚にも眼瞼下垂が起こった。その後、行動範囲が広がり思わぬ場所で、偶然にもばつ悪く幾多の著名な先生方にお会いし、会場を遠くに仰ぎながら昼間から杯を挙げながら特別講演に耳を傾けた。日に日に記憶の断捨離が進む中で、今だに鮮明に蘇るのは、このような情景ばかりで不甲斐ない。新しい情報交換の場所であった本学会は、少なくとも私にはそれにも増して良き友に巡り合う貴重な場であったことは間違いない。

“3 密”でお会いしたい友人・先輩はまだまだ多くいらっしゃるが、定年後は学会から少し疎遠になり叶えられていない。それでも学会とは無縁の場所で突然お会いする野村総一郎先生との“密会”は、本学会で何事も全力で頑張った頃の実に楽しかった思い出がそこはかとなく漂う至福の時となっている。Y 新聞連載の難解な「人生案内(相談)」に対する回答者 野村先生の快刀乱麻には、今後も目が離せない。

JSNP50 周年を迎えるにあたって

JSNP と私：赤城合宿から CINP に至るまで

山脇 成人

広島大学 脳・こころ・感性科学研究センター 特任教授



JSNP50 周年にあたり、個人的な思い出になりますが、歴史を振り返ることで祝辞とさせていただきます。私は 1979 年に広島医学部卒業後、精神科に入局しましたが、まだ大学紛争の余韻が残っており研究できる環境にはありませんでした。研究に飢えていた私は、当時セロトニン研究で著名であった広島薬学部薬理学の瀬川富朗教授の門をたたき、精神薬理学を学び始めました。翌年に JSNP の前身である精神薬理談話会に入会し、赤城合宿に参加することになり、田所作太郎教授から軍隊式の教育を受け、合宿の朝礼では国旗掲揚、君が代斉唱、ラジオ体操をすまして、セミナーが始まり、気合いを入れて勉強しました。同郷の先輩であった慶応大精神科の野村総一郎先生と同室になり、掃除の仕方や毛布のたたみ方まで徹底的に指導を受けるという、今ではあまり見ることのない昭和（戦時中？）の風景でした。

談話会は JSNP へと発展しますが、この学会の最大の魅力は、精神科医（臨床）と薬理学者（基礎）がざっくばらんに本音で意見交換できることでした。名城大鍋島俊隆先生からは液クロの指導を、九大山本経之先生からは行動薬理の指導も受け、今でも頭が上がりません。当時の JSNP は群馬大の田所先生、実中研の柳田知司先生などがリードされた薬物依存の行動薬理学が主流でした。その影響も受けて私は、シンナー中毒の幻視とセロトニン受容体というテーマで学位を取得しました。その後は、東京医科歯科大精神科高橋良教授のうつ病セロトニン受容体感受性亢進仮説に魅了され、うつ病の精神薬理学研究に傾倒するようになりました。

国際神経精神薬理学会（CINP）は JSNP の親学会ともいえる学会で、CINP でポスター発表するだけでも緊張したもんですが、いつか口頭発表したい、シンポジストや座長をしてみたいという憧れの国際学会でした。高橋良先生が CINP の Councilor になられ、念願であった CINP1990 年世界大会の京都開催に尽力されましたが、残念なことに肝臓癌で亡くなられ、JSNP 会員は追悼の思いも込めて募金活動に奔走し京都大会が実現しました。この大会で JSNP の国際化が進み、その後米国神経精神薬理学会（ACNP）ハワイ大会、カナダ神経精神薬理学会（CCNP）バンクーバー大会に招待参加するなど JSNP の存在感は増していききました。

2001 年に JSNP（鍋島会長）、JSCNP（山脇会長）がホスト学会となって CINP アジア地区大会が広島で開催されました。その後、私は Councilor、Secretary の役が回って来ていましたが、アジアからのシンポジストは少なく、存在感や発言権はあまりありませんでした。

CINP に参加していた中国、韓国、台湾などの研究者らからアジア神経精神薬理学会 (AsCNP) 設立の気運が高まり、2008 年に AsCNP 創設理事会が発足し、翌年 2009 年に京都で JSNP/JSCNP と同時開催で AsCNP が開催されました。樋口輝彦国立精神神経センター総長、JSNP の会員の皆様の強力な後押しで 2014 年に CINP President に選出され、Vice-President にも札幌医大の斉藤利和先生が就任され、一気に JSNP の存在感が増してきました。その後も、石郷岡純先生、池田和隆先生のご尽力で JSNP は着実に発展し現在に至っていることは同慶の至りです。

一方で、メガファーマが向精神薬開発から撤退するなど神経精神薬理学は危機の状態になっており、最新脳科学研究の成果を導入した、新たな JSNP からの貢献が期待されています。我々の世代は研究が出来る環境になかったのだとばかり Hungry で、JSNP で仲間を作ることが最大の財産でした。Post/With コロナ時代で活躍する次世代の会員の皆様には、これまでにない斬新な視点と、AI 技術、デジタル技術駆使し、精神疾患の患者さんを救うために、JSNP をさらに発展させて 100 周年が迎えられることを祈念しております。

1995 年 カナダ神経精神薬理学会 (CCNP) バンクーバー大会



2001 年 国際神経精神薬理学会 (CINP) アジア地区大会・広島



2008年 アジア神経精神薬理学会 (AsCNP) 創設理事会・東京



2016年国際神経精神薬理学会 (CINP) ソウル大会

